

# 東京喰種【赤鬼】

マツユキソウ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※10月5日、あらすじを変更しました。

食物連鎖の頂点はいつの時代もヒトであった。

しかし、いつの頃からかヒトを食糧として狩る者達「喰種」が現れた。

そんな「喰種」から人命を守る為に、ヒトは喰種対策局を設立した。

喰種とヒトとの、終わりの見えない争いが始まってしまった。

岸花 雪は子供がダイスキな喰種である。

長年の夢であった保育士の資格を取得し、幸せな日々を過ごしていたが……

全ては彼女のごっこ遊びであつた。

# 目次

子供	1
息子	7
公園	13
会話	18
遭遇	23
この世界を歪めているのは	35
貴方の力じゃない	44
恐怖	51
勧誘	60
幹部	70
……貴方の為に運んだわけじゃないか	

ら	80
ヤモリと赤鬼とオカマ	93
始まり	109
悲劇	120
笛口	127
尾行	135
それぞれの想い	143
何の為に、誰の為に	152
また会う日まで	166
第二章	
プロローグ	176

# 子供

食物連鎖の頂点はいつの時代もヒトであつた。

しかし、いつの頃からかヒトを食糧として狩る私達〔喰種<sup>グール</sup>〕が現れた。

人肉を食す私達はヒトにとっては天敵でしかない。

だからヒトも、私達を狩る喰種捜査官という天敵を作つた。

……喰種とヒトが共存するなど、万に一つあることではないのだ。

殺して、殺されて……また殺して……殺される。

まるで、戦争だ。

終わりのない戦争……

私は……

『せんせー！ 人形先生！』

「ツ!？」

後ろから聞こえてきた声で我に返った私は振り向く。

私の後ろには、太陽の光にも負けない笑顔で私を見つめている子供達がいた。

可愛い……頑張って保育士の免許を取った甲斐があつた。

「人形せんせ、鬼ごっこしよー」

「私は人形じゃない……雪先生って呼んでくれないと遊ばない」

子供達は私のことを人形先生と呼ぶ。

私がいつも無表情で無口という理由らしい……ちよつとシヨック。

私にもちやんと喜怒哀楽はありますよ。

ただ、ポーカーフェイスって言うのでしょうか、感情が表に現れないのです。

無口なのは……元からです。気にしたら負けです。

「じゃあ、ゆきせんせー鬼ごっこー」

「……うん」

じゃあつて……酷い……

私が傷ついているのもお構いなしに嬉しそうに引つ張つていく子供達。

本当に、子供は可愛らしいですね。

だけど……この子供達が大きくなつて、私達喰種のことを知ったらどう思うのかな。

私がヒトを殺して、その肉を食べている化物だしたらこの子供達は……

「せんせい?」

子供達が心配そうに私を見ていた。

「……………どうしたの?」

「ゆきせんせい、何だか悲しそうな顔してたから」

「……………気のせい」

私は子供達の頭をわしやわしやと撫でた。

まったく、私が顔を崩すことはないのに……………どうやって私が悲しそうな顔をして  
るって感じとったのでしょうか。

もしかしたら、何も知らない子供だからこそ、少しの変化でも感じ取ってしまうのか  
もしれませんね。

「それより、私が……………鬼ね。早く逃げないと捕まえちゃうよ」

『きゃあああああ!』

私がそう言うとき子供達は蜘蛛の子を散らしたかの様に逃げていった。

☆☆☆☆

「ゆき先生のさっきの顔は何だったのかな」

僕は、さきちゃんを追いかけている雪先生の方を見る。

無表情でさきちゃんを追いかけている先生は何だかとても怖いけど、僕達は先生がとっても優しい先生だって知っている。

雪先生がここに来たのは、桜っていう木が花を咲かせている時だった気がする。

新しい先生が来るって園長先生に聞いてたからとってもワクワクしてたけど、初めて雪先生を見たときは怖かった。

顔は僕のお母さんより百倍綺麗で何だかおとぎ話のお姫様みたいなんだけど無表情で、髪の毛は真っ白。

何にも言わないからお人形みたいだなーって思ったから、僕達は雪先生のことを人形先生って呼ぶことにした。

始めの頃はみんな怖がって雪先生に近寄らなかつたけど、いつの間にか雪先生と遊ぶようになってた。

雪先生はいつも僕達と遊んでくれたり、絵本も読んでくれる。

保育園の誰かが誕生日だとプレゼントもくれる。

お泊りで遠足に行った時に寂しくて寝れない子には寝るまで傍にいてくれたり、子守唄を歌ってくれた。

……雪先生が歌う子守唄はとっても怖かつたけどね。



でも、みんな雪先生のこと大好きだ。

お人形みたいに無表情で冷たい感じだけど、とつても優しくて温かい……そんな雪先生のことみんな大好きだ。

だから、雪先生が悩んでいるなら少しでも力になりたいって思ってる。

「……りよう君捕まえた」

「!？」

いつの間にか僕の後ろにいた雪先生は僕を持ち上げた。

雪先生はとつてもいい匂いがして、温かかった。

こんな日が毎日続くと思っていた。

あの日までは……

☆ ☆ ☆

私が一歩踏み出すとピシヤリと水が跳ねた音がする。

私が走れば床に溜まっていた水が私の足を、腰まである髪を濡らす。

私は走るのをやめて床に転がっていた歪んだボールを持ち上げる。

私がボールを抱えて歩きだすと、他にもいろいろな物が落ちていることに気づく。私は立ち止まり周りを見渡す。

……ドウシテ

十区○△保育園に喰種が侵入、児童及び職員全員が死亡。

現場に駆けつけた宇良准特等並びに喰種捜査官一五名、全員死亡。

この被害を受け、喰種対策局は対象をSS級駆逐対象〔赤鬼〕と認定した。

## 息子

喰種対策局十一区支部。喰種捜査官と呼ばれる彼等は、喰種から人命を守る為に日々喰種の情報や被害状況の整理、喰種の捜査などを行っている。

俺、久土正人も喰種捜査官としてある事件を起こした喰種を捜査するために本部からこの十一区支部へとやって来たわけだが……

「赤鬼らしき喰種と接触するも澤戸上等及び井土二等捜査官、死亡」

俺の机の上には二人の捜査官の死亡通知書が置かれていた。

喰種捜査官が殺されるのはこれで何人目だ。いい加減尻尾を掴ませてくれよ……頭を抱えながら、俺は一向に進まない調査書へと目を移した。

SS級駆逐対象【赤鬼】、去年の冬に十区の○△保育園を襲撃。

園児並びに職員全員が死亡。現場に駆けつけた喰種捜査官十六名、全員死亡。

その後、赤鬼は姿を消すが一週間後の大晦日に十一区で喰種捜査官二名を襲撃。

今日まで、赤鬼らしき喰種と喰種捜査官が何回か交戦するも駆逐には至らず。

赤鬼の性別及び赫子の特徴は不明……現在調査中である。

「はあ……」

ため息をつくときと幸せが逃げると言うがこれはつきたくなる。

何せ、赤鬼について何も分かっていないからだ。

性別も不明、赫子も不明……唯一分かっていることと言えばヤツが付いているマスクが般若の面という事だけだ。

……殆ど何も分かっていない喰種だが、これだけはわかることがある。

コイツは絶対に狩らねばならん存在だ。

何の罪もない子供達の未来を壊したクズの中のクズだ。

「久土さん、何だか怖い顔してますけど大丈夫ですか？」

「あ……いや……」

どうやら気持ちに顔に表れていたらしい。

隣の机で赤鬼の目撃情報を整理していた俺の相方の広野一等捜査官に声をかけられた。

「はあ……どうせまた、赤鬼について考えてたんでしょ」

「う……そんなところだ」

何故かはわからんが、広野は俺の考えていることが分かるらしい。

エスパーかコイツは……それなら赤鬼についての情報も知っていても……

つと、冗談はさておき。

今の様に、広野は観察力に優れている。顔の表情や些細な変化などで相手がどんな人物なのか、何を思っているのかが分かるらしい……意味がわからん。

まあ、広野の観察力は喰種にも通用するのでかなり助かっている。

「久土さん、僕のことを考えているでしょ」

「何故わかった……」

うむ、やはりコイツはエスパーだ。

「いや、久土さん僕の方をジューっと見てたじゃないですか、そんなに見られたら嫌でもわかりますよ」

「む……そうだったのか」

「そうですよ！ 集中するとそこしか見なくなる、久土さんの悪い癖です」

「はは、治すように努力するよ」

そう言いながら広野の肩をポンポンと叩く。

叩き終わると同時に鐘の音が響き、俺は立て掛けてあった時計を見るといつの間にか夕方の六時になっていた。

「もうこんな時間か……」

「久土さん、あとは僕がやっておきますから早く帰って創多君と遊んであげて下さい」

「いつもすまんな広野、また今度飯でも奢るよ」

「いいってことですよ。創多くんにまた遊ぼうなって言っておいて下さい」  
「ああ、言っておくよ。ありがとうな広野」

俺は帰り支度をして広野に「お疲れ様」と言った後、支部を後にした。

創多は、俺の一人息子だ。

妻が病気で亡くなった後、男手一つで育ててきた大切な……大切な息子だ。

来年で小学生になる創多は、外で遊ぶことが大好きでよく広野とかくれんぼや缶蹴りなんかをして遊ぶ。

…いつも明るくて元気な創多だが、一人の時に見せる悲しそうな顔が俺には耐えられない。

なるべく、早く帰って一人でいる時間を減らしてやりたいんだが…難しいんだよなあ

…

そんなことを考えながら歩くこと数分、いつもの帰り道で通る公園に見覚えのある影が…

「創多!?!」

「あ、パパだ〜」

家で待っていると思っていた創多が支部の近くの公園にいて大きな声を挙げてしまった。

こちらに走ってきた創多を抱き上げたが、俺の頭はかなり混乱していた。

「そつ創多、どうしてお前がこんな所に」

「えーとね、パパが帰って来るのをこの公園で待ってたの」

「一人でか？」

「ううん、真つ白なお姉ちゃんと一緒に待ってたの」

創多が一人で居なくてホッとしたが、気になったことがある。

「創多、真つ白なお姉ちゃんってどういうことだ？」

「んー、真つ白なお姉ちゃんは真つ白なお姉ちゃんだよ」

「そ、そうか」

創多の曖昧な答えに納得はいかないが、どうやら真つ白なお姉ちゃんに世話になったらしい。

なら、父親として息子が世話になったのだからお礼は言わないとな。

俺は真つ白なお姉ちゃんを探そうと辺りを見渡すが、真つ白な服又は白い何かを付けている人物は見当たらなかった。

っていか人が誰もいなかった。

「その真つ白なお姉ちゃんはどこに行ったんだ？」

「さつきまで、居ただけけど…あれー居なくなっちゃった」

、どうやら創多も分からないらしい。

仕方ない、また今度会えるだろう……

「まあ……帰るか」

「うん！」

俺と創多は手を繋ぎながら家への帰り道を歩いて行った。



## 公園

「く、久土さん……創多君そうたがいたのは……支部近くの公園で間違いないですか？」

「ああ、そうだが。どうした広野、顔色悪いぞ？」

昨日の創多との出来事を広野に話すと青ざめた顔でそんな事を聞いてきた。

「ヤバイですよ久土さん、創多君は幽霊に出会ったんですよ」

「はあ……幽霊ってお前、そんなモンがいると思ってるのか」

何を言うかと思えば幽霊だなんて、いる訳無いだろ。

まさか、広野が幽霊を信じるタイプの人間だったとはな、広野もまだまだ子供つてことだな。

「久土さん、僕は子供じゃないですよ。」

「おお……」

流石エスパー、俺の考えていることはお見通しみたいだな。

「僕だって初めは信じてなかったんですよ。でも、かなりの人があの公園で真っ白い少女を目撃しているんです！絶対に、幽霊ですよ！」

「わかったわかった。仕事しような」

少し興奮状態になって俺の肩を揺さぶる広野を宥めようとした。

「わかってないですよ。それに、その少女の幽霊は子供を攫うっていう噂ですよ」

「……幽霊なんている訳無いだろ。そんなこと言ってる暇があったら赤鬼の情報でも探してんぞ」

俺が少し強めに言うと、広野は「じゃあ、聞き込み行つてきます」と言つて出て行つてしまった。

☆☆☆

昼休み。俺は支部近くの公園へと足を運び、ブランコの横にあるベンチに座り辺りを見渡す。

平日のお昼ということもあり、公園には散歩の途中であろう老人と数人のサラリーマンが公園の横道を通るだけであった。

「やっぱり、いるわけないよな……」

俺の呟きは誰に聞こえるわけもなく、寒風によって虚しくかき消されてしまった。

この寒い中、公園に来たのには理由があった。

『その少女の幽霊は子供を攫うっていう噂ですよ』

先ほどの広野の言ったことが気になってしまったからだ。

言っておくが幽霊なんて信じてないぞ。もし、子供を狙う喰種グールだったら確かめないといけないからな。

それに幽霊の正体が、昨日創多が出会った真っ白なお姉ちゃんだったら、ちゃんと礼を言わないといけないし：あと、無いと思うがSS級駆逐対象の赤鬼っていう可能性もあるしな：

三十分程待つてみたが公園の前を人が通るだけでそれらしい人物は現れることはなかった。

まあ、所詮噂話。わかっていたことだ。

俺はそう自分に言い聞かせてベンチから立ち上がり、駆け足で支部へと向かおうとした瞬間。俺の横でポツンと立っていたブランコの一つが揺れているのに気づいた。

ん？風は吹いていないのにどうして揺れているんだ。

俺は風もないのに揺れたブランコを不審に思い近づいて調べる。

揺れていたブランコは所々錆びていたが別にこれといって異常は見られないようだった。

ふむ、さつき揺れたのはきつと俺が気づかない間に誰かが乗ったんだろう：

これにて、不意に揺れたブランコ事件解決。この公園の平和は守られたな、やったね

俺、大手柄。

そんなくだらない事を思いながら公園を後にしよう歩き出すが、自分の推理がおかしいことに気づく。

誰かがブランコ乗ったとして、そのブランコに乗った奴はどこに行ったんだ？

この公園の周りは柵で囲まれていて出入り口は一つだけ、俺が座っていたベンチの正面に出入り口があるんだから誰かが通れば直ぐにわかる。

仮に柵を乗り越越えて入ってくる。または出たとしても柵を登る音がするはずだ…なのに何の音もしなかった。

『真っ白なお姉ちゃんと一緒に待っていたの』

『創多君は幽霊に出会ったんですよ』

創多と広野の言葉が頭をよぎる。

馬鹿馬鹿しい、幽霊なんている訳無いだろ…そうだ、ブランコが揺れたのはきつと何らかの偶然が重なって揺れただけだ。

「……………んにちは」

「ツ!？」

不意に俺の背後から声が聞こえた。

恐る恐る振り返ってみると、そこにはブランコに座ってこちらを見ている少女がい

た。

## 会話

挨拶。ヒトとヒトが出会った時にするもので自分の印象を良くする大切な行動。だから私はヒトに出会ったらまず挨拶することになっている。

例えそれが殺す相手だとしても……

「……こんにちは」

「ツツ!」

私が挨拶すると、目の前に立っていた男のヒトは驚いた様子で振り返った。

男のヒトと目線が合うが直ぐに逸らされてしまった。シヨックです。

それにしても……この雰囲気。服装。そして右手に持っているアタツシユケース。

……このヒト、喰種捜査官。

喰種捜査官。彼等のことを白鳩って呼ぶ喰種もいるけど呼び方なんてどうでもいい。

喰種捜査官なら殺す。それ以外の選択肢はない。

「君はもしかして昨日、創多そうたという男の子と一緒にこの公園にいなかったか？」

男のヒトがいきなりそんな事を言ってきて少し驚いたが、創多という名前には聞き覚

えがあった。

昨日の夕方、男の子が一人で道を歩いているのに気づいた私は、いてもたってもいられず声をかけた。その声をかけた子の名前が創多だった気がする。

「一緒にいた」

「おお！ やっぱりそうか、昨日は息子が世話になったな。ありがとう」

「…気にしない」

……そつか。創多君はこのヒトの息子なんだ。

「俺の名前は、久土正人だ。もし良かったら名前を覚えてもらえないか？」

「岸花…雪」

「岸花雪か、じゃあ雪ちゃんだな」

「何でもいい」

少しの会話でわかったけど、このヒト隙が全然ない。

私と話している時でも周囲に目を配らせているし、私の行動一つ一つに反応している。

今まで殺してきた捜査官より強そうだけど……殺せる。

「そつかそつか。じゃあ、もう一つ質問」

先程まで笑顔だった正人さんは真剣な顔つきになり。

「雪ちゃんは、喰種かな？」

「どうして？」

質問の意味がわからなかった。

いえ、質問の内容は理解していますがどうしてそんな事を聞いてくるのかわからなかった。

まだ出会って数分なのに私が喰種だつてバレた…いえ、それはないですね。

もしバレたのならこんなことを聞かずに私を殺すはずです。

では、何故こんなことを聞くのか…：わからない。

「ごめんごめん。今の質問は忘れてくれ、何となくで聞いただけだからさ」

「…：…：そう」

今の言葉を聞いてわかりました。

正人さんに私が喰種だつてバレました。

でも、不思議です…：正人さんから殺意が全く感じ取れません。

「俺はそろそろ仕事に戻るよ。またね」

正人さんはそう言うとう手を振りながら駆け足で去っていった。

どうして…



## ☆☆☆

「岸花雪かあ」

俺は先程別れた少女のことを思い出していた。

彼女の第一印象はとても綺麗な子だった。

透き通る様に白い肌。腰まである髪は雪の様に美しい白色。顔立ちは整っており、十人彼女とすれ違えば全員が必ず振り向く。と断言できる程の美少女。

しかし、二つ気になったことがあった。

一つ目は彼女の目だ。彼女の目は屍人しびとの様に生気が感じられなかったのだ。

光など一切入る余地のない黒。目を合わせた瞬間、引きずり込まれてしまいそうな程だ。

二つ目は表情。彼女は俺との会話中、終始無表情だった。

表情を変えずに話すものだから、まるで機械を相手にしているかの様だった。

そして、わかったことがある。

彼女…岸花雪は喰種だ。

いや、証拠とかないよ。何て言うのかな、長年の勘ってヤツかな。

じゃあ、喰種とわかっているなら何で見逃すんだって話なんだけど……自分でもよくわからん。

だが、今度会った時は狩る。それが俺達喰種捜査官の宿命だからな。

空を見上げると、いつの間にか雪が降っていた。

## 遭遇

岸花雪と出会ってから二週間が経った。

毎日の様にあの公園の前を通り過ぎるが、彼女と会うことはなかった。

それが良いことなのか悪いことなのか俺にはわからないが……

「ふうん、君が使えない准特等の久土正人だね。私は出月宗輝<sup>いでづきそうき</sup>。君と同じ准特等だ。よろしく」

「齋藤和樹<sup>さいとうかずき</sup>二等捜査官です。よろしくお願いします」

「あ…ああ、よろしく」

俺の目の前にいるコイツらは絶対に悪いことだ。

出月准特等は、俺が握手しようと手を出したら普通に無視するし、サラツと使えないとか言われた。あと、齋藤君は俺を睨むのをやめて下さい。

それにしても、何でコイツらここにいるんだ？

「ふう、どうして私達がここににいるのか？つて顔しているな。君が何時まで経ってもS級駆逐対象である赤鬼について何も調べられないから、私達が応援に駆けつけたの  
「や」

出月准特等はそう言うのと掛けているメガネを右手でくいつと直した。  
「そうでしたか……」

「ホントすみません。全力で調べているんですけどここ最近、赤鬼の目撃情報がなくて……」

「准特等ともあろうお方が言い訳ですか。情けない」

「齋藤！ 貴様、二等捜査官のくせに偉そうに……」

俺達の会話を聞いていた広野が叫んだ。どうやら、先程からの俺に対する二人の態度が気に入らなかつたらしく怒るのを我慢していたが、どうやら今の一言で我慢の限界を越えたらしい。

「落ち着け広野」

「っ……しかし！」

「もう一度言うぞ。落ち着け広野。そう言われても仕方ないことだ。すまないな齋藤君、情けないことに赤鬼について何もわからないんだ。君達が手伝ってくれると助かるよ」

俺は彼等に向かって頭を下げた。

確かに嫌な奴等だが、赤鬼について何も掴んでいないのは事実だ。

それに、今こうしている間にも誰かが襲われているかも知れないのだ。ならば、こん

な事で時間を食っている暇などない。

「協力して赤鬼を調査しましょう」

俺は握手をしようともう一度手を出す。しかし、彼等が手を取ることはなかった。

「私達は、私達のやり方で赤鬼を調査：いや、駆逐してみせよう。情報の共有はしても干渉はしないで貰おうか」

「駆逐：まだ赫子もわかっていないのに赤鬼と戦うのは危険だと思えますが？」

「ふん、出月准特等は数々の喰種を殺している。貴方とは違うのですよ」

「斎藤、貴様……」

「ふう、広野落ち着け。わかりました。では、俺達は俺達なりに調査するので何かわかったら教えます」

「うむ。では私達は準備があるのでな、斎藤君行くぞ」

「はい、出月准特等」

彼等はそう言うのと出て行ってしまった。そして、出て行く瞬間にまた斎藤君に睨まれました。

「何だアイツ等、失礼にも程があります」

出月準特等達が出て行った後、広野が鬼の様な顔で彼等が出て行ったドアを睨んでいた。

怖いよ〜広野。

「まあまあ、あんな風に言われてもしようがないよ」

「ですが…そうですね。僕達はいつも通り調査するだけです。恥ずかしいところ見せてしまいました」

そう言うとき広野は俺に頭を下げて謝ってきた。

「気にすることないよ。俺のために怒ってくれてありがとうな」

「いえいえ。今日も一日頑張りましょうか」

俺と広野は笑い合い。いつも通り仕事に取り掛かった。

ただ…何となくだが今日は何かが起こる。そんな気がした。

☆ ☆ ☆

どこまでも暗く、普段は人が寄り付くことはない裏路地を、俺と広野は月明かりだけを頼りに全速力で走っていた。

『こちら出月。赤鬼を誘き出す準備が出来たよ。もし良かったら見に来るといい』

俺達が聞き込みをしていると、出月准特等から通信が入ったからだ。

赤鬼を誘き出す？どうやって。それに、出月準特等は赤鬼について何かわかったのか？

いや、考えるのは後だな。まずは現場に行くことの方が先だ。

裏路地を走って数分後。少し広い所に出た俺達の目の前には、出月準特等と斎藤君。そして…鉄の檻に入れられた喰種の子供がいた。

「おや、来たようだね」

出月は俺達に気づき振り返ったがそんなことはどうでも良かった。

檻に入れられた喰種の子供の右目と両手足に釘が打ち込まれていたからだ。痛々しいその姿はとてもしゃないが見ていられなかった。

「出月、これはどういうことだ？」

「何がかな？」

「とぼけるな！お前は赤鬼を誘き出すと言ったな！あれは嘘か!!」

「はあ、嘘ではありませんよ。コレを使って誘き出します」

出月はそう言って喰種の子供の頭を蹴った。

まるでその辺に転がっている石でも蹴るように…

「貴様…」

いつの間にか俺は出月の胸倉を掴んでいた。

「何をそんなに怒っているのです。コレはゴミです。私達に害をなすだけのただのゴミ。ゴミをどうしようが私の勝手ですよ」

「きつ貴様…喰種だつてな、俺達と同じように生きてるんだぞ…それをゴミだと？ふざけるのも大概にしろ!!」

俺は右手を振りかぶり出月を殴ろうとした…しかし、不意に誰かに右手を掴まれた。

まあ、十中八九広野だな。俺の後ろにいるのは広野だったからな。

「広野、すまんが手を離してくれないか？俺はコイツを一発殴らないと気がすまない」

「くっ久土…さん…俺じゃないです」

「っは？」

広野の言葉に時が止まった。

見ると広野は俺の斜め前で憤怒の表情で俺を睨んでいる斎藤君を抑えていた。

じゃあ、俺の右手を掴んでいるのは一体…

俺は恐る恐る振り返った。

真っ白なフード付きコートを着た鬼がいた。

いや、コイツが付けている般若の面には見覚えがあった。

SS級駆逐対象【赤鬼】。奴が俺の右手を掴んでいた。



「ツツ!？」

俺は反射的に掴まれていない方の左手で赤鬼の鳩尾みそわちを殴ろうと狙った。

しかし、簡単に避けられてしまい、反撃が来ると思った俺は身構えるが…どういいう訳か攻撃してこなかった。

赤鬼はそのまま俺と呆気にとられていた出月の横を通り過ぎると、喰種の子供が入っている檻の前まで行き、素手で檻を破ると中に入っていた子供を抱きかかえて去ろうとする。

「来てそのまま帰るなんてことはないでしょうなあ…赤鬼」

出月の言葉に反応した赤鬼は立ち止まる。

「…見逃してあげるから、早く帰れ」

こちらを振り向くことなく喋った赤鬼の声は、意外なことに少女の声だった。

そして、再び歩き出す。

「ふーん…鬼さん鬼さん、そのゴミ爆発しますよ?」

出月が右手に持っていたスイッチを押す。

パァン!という強烈な破裂音と共に…彼女が抱いていた喰種の子供が破裂した。

「いでづきいい!!」

俺はもう一度出月を殴ろうとするが、後ろからの強い衝撃で壁に叩きつけられた。

「く、久土さん大丈夫ですか？」

「ああ、どうやら手加減してくれたみたいだ」

俺と広野は壁の隅に行く形になり、彼女の目の前にいるのは出月と斎藤だけになった。

「どうやら、俺と広野は対象外らしいな。」

俺は返り血で真つ赤に染まった彼女を見る。

「…コロス」

彼女の雰囲気が変わっていた…

☆ ☆ ☆

久土正人とその隣にいる青年捜査官は後回し…

私は目の前にいる出月と呼ばれたメガネをかけた男とその横にいる斎藤と呼ばれた男を見る。

彼等は右手に持っているアタッシュケースのボタンを押して対喰種用の武器。クインケを展開した。

出月のクインケは金砕棒の様な物で、多分使われているかくね赫子は甲赫。

斎藤のクインケは剣の様な物……こつちも甲赫。

なら、私も赫子を展開しますか……

私は、肩甲骨の辺に力を込め、私の身長ほどの長さがある赫子を左右から出す。

「ふふ……ふははは！何だその赫子は、そんな物で勝てると思ってるのか？」

私の赫子を見た出月……メガネは腹を抱えて笑いだした。

初めて見た人は皆さん同じ事を言うんですよね……

「こんな赫子を使う奴に殺されるなんて、殺された捜査官達は無能な奴なかりです。出

月準特等はそこで見ていてください。私一人で十分です」

そう言つて斎藤……メガネ部下は私に斬りかかってきた。

右肩から左脇腹にかけての斬撃。回避……

振りかぶりは普通だけど振り下ろしが速い、並みの喰種なら今ので死んでいました

ね。

「へえ、今のを避けるんだ。じゃあ……これはどうかな！」

今度は剣先を前に突き出しての突撃。横に回避……

回避したと同時に横に一闪。これもジャンプで回避。

……速いけど単純過ぎ。次の攻撃がどこに来るのか直ぐにわかります。

次は私の着地を狙つてもう一度横に一闪……ほら来ました。甘い。

「当たらないですね。逃げだけは得意ですか、ですが逃げてばかりでは私を殺せませんよ？攻撃してきてみては？まあ、その赫子ではどうしようもないですが」

メガネ部下は体制を低くして私が攻撃してくるのを待つ。

どうやらカウンターを狙っている様ですが…甘い。

私はそのままメガネ部下に突進する。

彼が避けられる速さで顔めがけて拳を振る。案の定避けると、右脇腹から左肩にかけての斬撃を回避…ではなく赫子で受け止める。

「っなっ！」

「……ツカマエタ」

私は赫子で彼の右脇腹と左胸辺りを刺した…けど刺さりません。

メガネ部下は一瞬驚いた顔をしたが、刺さらないのを安心したのか笑みを浮かべた。

ふふふ、安心してはいけませんよ……

☆ ☆ ☆

彼女は斎藤に赫子突き刺した。が、刺さらなかった。いや、あの形状では刺さるは

ずがない。

彼女の赫子は肩甲骨の下辺りから出ているので恐らく甲赫。

甲赫の赫子は大抵、ランスやでかい鉞の様な形だったり盾だったりする。しかし、彼女の赫子は馬鹿でかいアイスの棒の様な形だった。

まあ、簡単に言うとかガ○ガ○君の棒の様な形だ。

あんな先が尖っていない赫子では人は殺せない。だが…あの形、アイスの棒以外にも似ている物があつたような…

「うぐあああああああああああ!」

齋藤が叫び声をあげた。

見ると、彼女の赫子が齋藤を抉っていた。

まるで木屑の様に辺り一面に肉と血が飛び散る…木屑の様に…

そうだ…アレはアイスの棒なんかじゃない。チェーンソーの刃だ。

どういふ原理なのかわからないが彼女の赫子は固化、流動化を高速で行いチェーンソーの刃の様に回転させているんだ。

「齋藤!今すぐ彼女から離れろ!」

俺は齋藤に向かって叫ぶが既に遅かった。

「…解体完了」

齋藤は両手足を切られ。右目辺りを抉られて無残な姿で壁に打ち付けられていた。「くふ、アハ……アはハハハ、アハハハハハ！」

彼女が愉快そうに笑う……

狂気がこの空間を支配していた。

## この世界を歪めているのは

「くふ、アハ…アはハハハ、アハハハハハ！」

いつも無口な自分が命を奪っておいてどうしてこんなに笑えるのかわからなかった。チラつと横目でたった今私が殺したヒトを見る。

両手足を切られ、右目を抉られて息絶えた彼の顔は苦痛と恐怖で彩られていた。

いつもの自分ならこんな風にヒトを殺さない。

私は後ろを振り向く。

そこには、生前はヒトの形をしていたとは到底思えない程にバラバラになった喰種の子供の死体がある。

この子はどうして死ぬ必要があったの？ヒトを喰らう喰種だから…違う。

それがこの子の運命だったから…違う。

『コレはゴミです。私達に害をなすだけのただのゴミ。そのゴミ…』

私はメガネの言ったことを思い出す。

ゴミ…私達は生きてる。さつき殺されたあの子だつて生きてた。

あの子にも家族や夢があつたはずだ。それを奪つていい権利なんて誰にもない。

……あの時と同じだ。

☆ ☆ ☆

その日は冬なのに珍しく雨が降っている日だった。

外で遊ぶわけにもいかず、部屋の中で積み木やドミノ等で遊んでいる子供達の楽しそうな様子を、私は椅子に座りながら微笑ましく見ていた。

しかし……

突然。ガシャーン！というガラスが割れる音と共にドサッと何かが倒れる音がした。

音がした方を振り向くとそこには血まみれで倒れている男性と、その男性を心配する



女性と子供がいた。

突然の出来事でパニックになった子供達を園長先生が落ち着かせることにして、私ともう一人の男性職員は彼等の所に行った。

「だ、大丈夫ですか？救急車呼びましようか？」

男性職員が声をかけると女性が振り向いた。

「っ!？」

女性の目は血の様に真っ赤に染まっていた。

赫眼かくがん…喰種が興奮状態。もしくは捕食、赫子かくねを使用する時の目。

つまり…この人達は喰種。

「ゆっ雪先生。この人達喰種ですよ！早く喰種対策局に連絡を…」

「……うん」

同じ喰種としてこの人達を助けたいって気持ちはあるけど、私は子供達を守る。

私は携帯を取り出し喰種対策局に連絡しようとするが、どうやらその必要は無かった様だ。

保育園の周りには約一五名の喰種捜査官達がネズミ一匹通さぬ。といった表情で取り囲んでいた。

これで一安心ですね。ですが、この人達が何をするかわかりません。警戒するに越し

たことはないでしょう……。

私は喰種の親子を見る。

「ママ、パパ、僕達死んじゃうの?」

「大丈夫だ……よ。希望<sup>のぞみ</sup>。パパとママが助けて、やるから」

「そうよ。アナタは私達が守るわ」

女性の喰種と男性の喰種がこちらを向く。

「喰種である私達が貴方達にお願いするのは間違っているのはわかっています。ですが、どうか、どうかこの子だけは助けては貰えないでしょうか……」

「お願いします。どうか希望だけでも……」

二人は涙を流しながら必死に頭を下げた。

何度も何度も……自分達が人を喰らう化物であるにも関わらず、彼等は頭を下げ続けた。

その光景を黙って見ていた園長先生が彼等の前まで行き。

「彼等を助けましょう」

力強くそう言った。

「しっかし、園長先生!」

「佐藤先生、確かに喰種は私達の命を脅かす天敵かもしれませんが。ですがあの光景を見

てください。親が子供の為に必死になる。私達人間と何ら変わりません。あんな光景を見て尚、彼等を助けなかつもりですか？」

「しかし…」

「佐藤せんせ、僕達からもお願いします。この人たちを助けてあげて」  
私達は後ろから聞こえた幼い声に振り向く。

そこには、子供達が真剣な表情でこちらを見ていた。

「お前達まで…喰種は人を食べる化物なんだぞ？それでもいいのか？」

『うん！』

子供達全員が頷いた。

「はあ、わかりました。喰種を…いえ、この人達を助けましょう！それに…」

佐藤先生はゆっくりと希望君に近づき。

「保育士として、子供が悲しむ姿なんて見たくないからね」

そう言つて彼は希望君の頭を撫でた。

例え僅かな時間だったとしても…この選択が世界に何ら影響を及ぼさなくても…  
喰種と人が、一つになった瞬間だと私は思った。

私は……私はその光景に涙を流して黙って見ていた。

「さて、そうと決まればまずはカーテンを閉めないかね。中の様子を捜査官さん達に見られたら大変だからねえ」

……っ!? 涙なんて流している場合じゃないですね。

私は園長先生に言われた通りにカーテンを全て閉めた。

確かに、これなら外から中の様子がわからないので下手に突入できないはず。

何故カーテンを閉めたのか?と聞かれたら喰種に脅されて仕方なく、とでも言っておけば大丈夫でしょう。流星は園長先生です。

「じゃあ次は怪我をしている。パパさんの止血ですね。雪先生、保健室から救急箱をとって来て下さい」

「園長先生、俺達喰種は怪我をしても自然に治ります。だから、大丈夫です」  
「それでもやっておいて損はないでしょう。雪先生お願いします」

「……はっ」

私は救急箱を取りにドアを開けて廊下に出た。

廊下に出た瞬間。左右から喰種捜査官が二人、私の方に走ってきた。

「大丈夫ですか?」

彼等は私を柱の後ろへと連れて行くとそう言った。

「…大丈夫です。でも、」

「ちよつと待つて下さい」

私の言葉を遮ると、捜査官が無線を取り出して何やら話している。

『こちら佐賀一等捜査官。宇良準特等、人質を一名保護しました。突入するなら今かと』  
『そうだな。クズの為にこれ以上時間をかけるわけにはいかない。全員、一分後に突入  
!』

『了解しました』

……え……突入?

「……突入するんですか?」

私は彼等が言ったことが信じられなかった。

「はい、ここは危険ですので貴女は避難していて下さい」

「でも、中には子供達が……助けないの?」

私がそう言うのと彼等は互いに顔を見合わせた後、大きなため息をした。

「あのな、この状況でガキを助けるのは不可能だ。」

「……でも喰種から人命を守るのが貴方達の仕事でしょ?」

「はあ、クズ共を狩るには少なからず犠牲が付き物だ。諦めろ」

「……でも子供達の親には何て説明するの？」

「我々が突入した時には、既に手遅れでした。とでも言っておけばいいんだよ」

「そうそう。喰種のせいにしとけばいいんだよ」

意味がわからなかった。

「どうし……『ドオオオン!!』て……」

私が言い終わらないうちに、大きな爆発音がする。

それを合図に次々と部屋に突入していく捜査官達……

子供達の悲鳴が、泣き声が、佐藤先生と園長先生の叫ぶ声が聞こえる。

静かになった。

私はすれ違う捜査官達を無視して部屋に向かった。

私は部屋に入る。

私が一步踏み出すとピシヤリと血が跳ねた音がする。

私が走れば床に溜まっている血が私の足を、腰まである髪を血で赤く染める。

私は走るのをやめて床に転がっていたリヨウ君の顔を持ち上げる。

私がリヨウ君を抱えて歩きだすと、他にも様々な大きさの手や足が落ちていることに気づく。

私は立ち止まり周りを見渡す。

子供達も、園長先生も佐藤先生も……みんなが助けようとした喰種の親子もみんな死んだ。

ワタシ……全員殺した。

☆ ☆ ☆

そうだ……そうだそうだそうだ。

この世界を歪めているのはヒトでも喰種でもない。

私は、目の前にいるメガネを見る。

お前達……喰種捜査官だ。

## 貴方の力じやない

世界を歪めているのはお前等だ。

なら…

「コロス…」

私はメガネとの距離を詰めると赫子で右手と左足を狙う。

「そんな攻撃！」

私の攻撃を避けたメガネは、お返しとばかりにクインケを横になぎ払う。

姿勢を落として避けた後、メガネの腹部に蹴りを入れてそのまま距離を取る。

メガネのクインケは大きさ、形からしてかなりの重量があるようですね。

攻撃を一度でも受けければ、致命傷は免れませんね。

なら…

私は半円を書くように赫子かぐねを大きく横に振る。

遠心力がついた一撃は、かなりの速さと破壊力を持ちます。

まあ、隙が大きいので避けられた後反撃されるかもしれないが…

「そんな攻撃。見え見えなんですよー！」



メガネは後ろにステップして避けると、私の頭めがけてクインケを振り下ろす。

ゴオオオと空気を裂く音。当たれば一発でアウトですが…

その程度の速さでは避けられてしまいますよ？

私は足に力を込めて横に飛び、そのままの勢いでメガネの背後を取る。

「…終わり」

私はメガネの心臓めがけて赫子を突き出す。

「ギミック発動！」

メガネがそう叫ぶと同時に、金砕棒の形をしていたクインケが盾の様な形になり、私の赫子を弾いた。

……まさかクインケが赫子の様に形を変えとは思いませんでした。

「ふははは、いくら貴女の赫子が強力であろうとも、私のクインケ【出月】の鉄壁の守りの前では無力ですよ」

確かに、メガネのクインケの盾モードは厄介ですね。

私の赫子の性質上硬い物はあまり切りたくないですから…まあ、切れますが…

でも、メガネのクインケはとても興味深いですね。

「ふふ、どうです…この圧倒的防御力。攻撃力はあまり期待できませんがそのマイナス面をも補う程の硬さと耐久力を持っています。そしてこのクインケの素晴らしさは防

御力だけではありません！見なさい、この月明かりに照らされて白銀に輝く私のクインケを：何と美しいことか！神々しいことか！傷一つ付いていないその姿は、まるで矛盾に出てくる最強の盾そのもの。どうだゴミめ、私の力にきよ：お・う

「話が長い：ウルサイ。気を抜くな」

私はメガネの背後に「普通」に回って「普通」に右脇腹辺りを手で貫いて壁にぶん投げる。

自分のクインケを自慢するのは構いませんが、話すことに夢中になって周りが見えなくなる。

メガネは馬鹿ですか？いえ、愚問ですね。馬鹿です。今までで殺してきたどの捜査官よりも馬鹿です。

私はクインケを盾から金砕棒のモードに切り替え、壁際で呻いているメガネの所に持って行く。

それに：

「……お前の力じゃない」

「っひ？」

殺意を込めてメガネを見下ろす。

確かに、このクインケの材料になった喰種を殺したのは貴方です。貴方の力でしょ

う。

でも、何を勘違いしているのでしょうかね。

このクインケの性能は私達喰種が死に物狂いで生きようと…殺されない為に身に付けた力です。

それを自分の力。などと勘違いしている貴方は…

「…殺します」

「ひっぐえええ」

私はクインケでメガネの右脇腹を殴る。

ベキベキと肋骨が折れる音がしたかと思うと、メガネは吐血した。

攻撃力はあまり期待できない。みたいな事を言っていましたでしたがこれなら普通に喰種もヒトも殺せますね。

「あがあああああああ」

今度は左脇腹を殴り、そのままの勢いで久土正人のいる方の壁に投げる。

ベシヤつという水分を多く含む物が潰れた様な音がした。

「あつ…ぐ…はあ…はあ…」

あれだけ殴打したのに…まだ生きているのですね。

さすがは喰種捜査官です。ゴキブリ並みの生命力。

ですが……

私はゆっくりとメガネに近づく。

最後は貴方のクインケで頭を割ってあげますよ。

止めを刺そうとメガネの頭に向かってクインケを振り下ろす。

このクインケの重量と喰種である私の力を合わせた一撃。

当たれば喰種であろうと必ず殺すことのできる一撃。

ガキイン!

しかし、私の一撃は横からの乱入者によって阻まれてしまった。

「ふう……そこまでにして貰おうか」

「久土……正人」

私の目の前には、先程まで空気だった久土正人がいた。

「ドウシテ……?」

「どうしてって、こんな奴でも一応仲間だし……それに」

久土正人はランスの形をしたクインケの先端を私に向ける。

「喰種捜査官として、黙ってこのまま見ているわけにもいかないでしょ」

迷いのない返答だった。

……

「アハ…アハハハははは」

今日だけでこんなに笑うなんて思わなかった。

「っ…何がおかしい！」

「いえ、貴方はとても良い人なんですわね」

「喰種に褒められても嬉しくないな」

正人さんはそう言うのと体制を低くしてランスを構えた。

「あはは、残念です。ホント…残念」

私も先程メガネから奪ったクインケを構える。

「…なんてね。」

私はクインケを肩に担ぐと、正人さんの横を通り過ぎ裏路地へと向かう。

「はあー」

後ろから、私が帰ることに安心したのか、正人さんが大きく息を吐いた。

「アハハ…コロスつて言つたよねえ」

振り返り、一瞬で間合いを詰める。

私はメガネの心臓を右手、喉仏の辺りを左手で貫いた。

ゴパアつと血が溢れる。硬い骨と柔らかな肉の感触が私の手に伝わる。

二度三度。メガネは痙攣するとそのまま動かなくなった。

「気を抜くな。つてさつき言ったよね？」

「ツツ!？」

私は呆気にとられていた正人さんの耳元でそう呟き、その場を後にした。

……そういえば、いつもより自分の思ったことを素直に言えた気がした。

私はそんな事を思いながら何となく空を見上げる。

今日の月は、一段と綺麗に見えた。

## 恐怖

様々な種類の草木が新芽を出す。

新緑の中。人々は新しい生活に戸惑い、期待、夢を抱き自分の足でしっかりと歩く。春が来たのだ。

「ふう、今日も一日頑張りますか」

自分に言い聞かせるがどうにも気分が上がらない。

別に今日に限った事ではない。ここ最近ずっとこんな感じだ。

殆どの人に春が訪れる中。俺、久土正人は真冬の中にいる気分だった。

SS級駆逐対象【赤鬼】の捜査が難航しているからだ。

出月准特等と斎藤二等捜査官が赤鬼に殺されて約三ヶ月が経過した。

あれ以降、奴は姿を現さず。沈黙を保ったままだ。

支部の奴等は「赤鬼……ああ、いましたね。そんなの」「他の喰種に殺されたのでしよう」等と無責任なことを言つて、実質赤鬼について調査しているのは俺と相棒の広野くらいだ。

くそ、支部の奴等はわかっていないんだ。奴は本物の化物だ：他の喰種に殺されるなんてあるわけがない。

俺は初めて奴と出会った時のことを思い出す。

『アハハ：コロスって言ったよねえ』

奴がそう言った後、何をしたのかわからなかった。

いや、正確には見えなかった。

俺と広野が振り返った時には、既に出月は首と心臓を貫かれて死んでいた。

これまでに何度か素早い喰種と戦ったことがあったが、ソイツ等とは比べ物にならない程。それこそ天と地の差がある程奴は早かった。

『気を抜くな。つてさつき言ったよね？』

どこまでも冷たく、何の感情も籠っていない声でそう言われた俺は肩を震わせた。

悔しさや怒りではなく、純粹な恐怖という感情。本能的に俺は喰種捜査官として一番考えてはいけないことを思ってしまった。

こんな化物に、人が勝てるはずがない：と。

だが、あれから三ヶ月経った。

反射神経と動体視力の強化を主に言い。自分でも成果が出てきたとわかるほどにま



で成長した。

今度奴と会った時は：いや、辞めておこう。考えるよりまず行動。

俺はマスクと保湿ポケットティッシュを四つ持ち。十一区支部を後にした。

☆ ☆ ☆

私は二十区のとある路地を歩いてた。

もうお昼だというのに暗く、ジメジメしたこの場所はヒトの往来が少ない：というより滅多なことではヒトは来ない。

何故、二十区にきているのかというと彼に頼んだ物を受け取りに来たからだ。

指定された場所に着いたのはいいが肝心の彼が居ない。

ちよつと、早く来すぎたかな：

私はフードを深く被ると近くの壁に寄りかかる。

彼との出会いは突然だった。

私があると目的で喰種を殺していると、彼がいきなり現れて

「狂気の中に咲く一輪の赤い花。T r e s s b i e n ! 君という存在に興味を持ったよ

！」

いきなり変な事を言ってきたので、何となく赫子で攻撃すると「c a l m a t o !」などと言って避けられました。

まあ、敵意がないとわかったので赫子かくねをしまい彼の話を聞くことにしたのですが…よくわからなかつたです。

うん、よくわからない喰種でした。

そんな事を思っていると、不意にこちらに近づいてくる気配がする。

「やア、赤鬼さん。久しぶりだね」

この場所とは明らかに不似合いなカラフルな服装で彼、月山習つきやましゅうが現れた。

彼は主に二十区で活動しているらしく、喰種や捜査官達からは「美食家グルメ」と呼ばれているらしい。

あと、わかっていましたが凄く変わり者らしい……

「まったく…相変わらず何も言ってくれないね。まア…そんなところも君の魅力でもあるんだけどね」

月山さんは髪をかきあげて私に向かってウインクする。

その行動自体は別におかしな所はないのですが、月山さんがやると怖いです…

「あア、僕としたことが、君との出会いに感動してしまい本来の目的を忘れてしまうところだつたよ」

月山さんは頭を抱え大げさに落ち込むと、右手に持っていたアタツシユケースを私に差し出す。

…何で跪ひざまずいてるの。怖いです。

「君の注文通り。このクインケの生体認証は解除しておいたから」  
「…」

「ああ！言わなくてもわかるよ。僕と君との仲じゃないか！」

両手を広げて空を見上げる月山さん。その行動にどんな意味があるのかわかりません。んが…

怖いです。本当に怖いです。

私はペコリとお辞儀をすると逃げるようにその場を離れた。

「ふふ、いつか君の声と素顔を拝見してみたいよ。」

最後に月山さんがそんなことを言った気がしましたが、気のせいです。幻聴です。怖いです。

早く、十一区に帰りたい…

月山さんから逃げるように去った私は、鼻を掠める独特な香りに立ち止まる。

……美味しそうな珈琲コーヒーの匂い。

私達喰種は人肉以外にも口にすることができるとある。それが珈琲だ。

匂いを頼りに足を進めると、「あんていく」と書かれた小さな喫茶店にたどり着いた。私が喰種だとバレないようにしないと……でも、一応私もヒトの社会に溶け込んでいたんです。そう簡単には喰種だとバレない……と思う。

それにしても、「あんていく」とは一体どういう意味でしょう？

私は店名に疑問を持つも、今も鼻を刺激している珈琲の良い香りに誘われてドアを開けた。

カランと鈴の音が鳴り、より一層香りが強くなる。

「いらっしゃい」

中に入ると、優しそうなお爺さんが出迎えてくれた。

☆ ☆ ☆

二十区にある喫茶店「あんていく」。ここは二十区に住んでいる喰種達の情報交換の場でもあり、俺達にとつての安らぎの場でもある。店長は芳村よしむらという初老の喰種。性格は温厚だが滅茶苦茶強いという噂らしい。

まあ、喰種が店を経営しているといつても人間の客も来る。要するにここは人間社会に溶け込んでいる喰種がよく集まる場所だ。時々、変な奴が来るが…

俺もよくここに珈琲を飲みに来てる喰種だが…きよ、今日でここも終わりかもしれないえ。

俺は恐る恐る先程入ってきた白いコートの奴を見る。

カウンターの席。丁度、芳村店長の前に座った奴は右手に持っていたアタツシケースを床に置く。

フードを深く被っていて性別がわからないがそんなことはどうでもいい！

問題は奴が白鳩ハトだつてことだ。

白鳩。通称喰種捜査官と呼ばれる奴等は俺達喰種にとつての天敵。

俺は、奴が置いたアタツシケースを見る。

一見どこにでもある様な形をしているが俺は騙されなぞ！その中にはクインケと呼ばれる対喰種用の武器が入っていることを！

向かいのテーブル席に座っている近江という喰種を見る。どうやら奴も気付いたらしく新聞を持つ手が震えている。

ツチ。動揺してるな。あれじゃ「俺は喰種です」って言ってる様なもんじゃないか。

こういう時こそ平常心。平常心。

スーハーハー。平常心平常心……  
むっ無理だああああああ！

こえーよ白鳩……何でここに来るんだよ！どっか行けよ。ここは俺達喰種の安息の地なんだよ！いや、マジでどっか行けよ！頼みます！

俺の必死の願いが通じたのか、珈琲を飲み終えた白鳩は一言も話さず出て行った。  
よっ良かった。マジで良かった……

☆☆☆

「……………緊張した」

私がお店の中に入ると、ピシリっとお店の空気が変わったような気がした。

何ていうのか、お店の中に怖い人が入ってきた！時の様な雰囲気になって少し気になったけど、それよりも気になったことがあった。

このお店……ヒトと喰種が一緒にいる。  
どうして？

その理由を考えようとするが……

でも……私には関係ないことですね。

思考を停止する。

私は珈琲を飲みに来たんです。このお店のヒトが喰種だろうとお客さんの中にヒトが混じっていようと私には関係ないことです。

ですが、先程から私を見る視線が気になります。

どっとういうことでしょう。すっごい見られています。私の左斜め後ろの席にいる喰種の男性なんか瞬きもしないで見ってきます。

怖いです…二十区…怖いです。

珈琲はとても美味しかったけど、私を見る視線が気になって落ち着いて飲めなかったです…

また今度、ゆっくり飲みたいな…私は一度振り返りまた歩き出す。

## 勧誘

どんよりと曇った日。

そろそろ雨が多くなる時期が近づいて来ているのか、最近はずれの日が少ない気がする。

午後から降ってきそうですね・・・急いで帰らないと。

私は少し歩調を早める。

数分ほど歩くと、不意に鼻を掠める血の匂いと喰種の気配。

この先の角を曲がった所に喰種が二人・・・何でしょう嫌な予感がします。

私は気配を殺して曲がり角まで行き、顔だけをそつと出して覗く。

そこには血塗れになって倒れている捜査官二名と喰種が二人立っていた。

喰種捜査官：違いますね。クインケを持っていないところを見ると、十中八九CCG

局員捜査官でしょう。

……………クスクス。

まあ、それよりも……………私は鬻體ドクロの様な仮面を付けている喰種達を見る。

どちらも同じ鬻體の仮面に同じコートを付けていますね。



どこかの組織の喰種でしょうか……それとも兄弟？

何にしても、関わらない方がいいですね。絶対に厄介事です。なるべく気配を殺して知らん顔で通り過ぎましょう。

私は道の隅を歩き、「何も見ていませんよ」という雰囲気ですり過ぎようとしたが……

「おい！ お前」

気づかれてしまいました。

……やっぱり無理ですよ。

「白いコートに特徴のあるアタツシユケース。お前喰種捜査官だな」

「くへへ、白鳩<sup>ハト</sup>は殺す」

え……喰種捜査官？ 私じゃないの？

私は辺りを見渡すが、それらしき人物は見当たらなかった。

どういふことでしょう。頭がおかしい喰種？

私としてはこの道を通りたいのですが二人が邪魔で通れません。

仕方ないですね。遠回りしましょう。

私は元来た道を引き返す。しかし回り込まれてしまった！

「おいおい、逃げるなんて選択肢はないぜ」

「お前はここで死ぬんだよ！」

どういふことでしょう……彼等はどう見ても私に向かつて殺気を出しています。あつ……

その時私は気づいてしまった。

自分の姿が喰種捜査官に似ているということ……

あはは……どうしましょう。

「死ねえー！」

二人は同時に飛びかかる。

右の男の赫子は甲赫かくね。左の男は鱗赫りんかく。

理由を話しても聞いてくれなそうですな……なら……

私はアタツシケースのボタンを押す。

ケースが開きカシヤンという音と共にクインケいですき【出月】が展開された。

うん。ちゃんと生体認証は解除できているみたいですね。さすが変態……月山さん。

私は二度三度その場で出月を振ると右足を引き体を右斜めに向けて脇構えの形をとる。

無力化しましょう。

甲赫の男が鈍の様な赫子を私の左肩に向かつて振り下ろす。

遅すぎ。あと、その距離は私の間合いですよ。

私は左足に力を入れて地面もろともアツパースイング。

ベガン! つという鈍い音がすると男は十五m程吹き飛び壁に激突するとそのまま動かなくなつた。

「きつ貴様…」

鱗赫の男は仲間が殺されたと思つたのか、怒りで肩が震えている。

安心してください、気絶させただけですから……たぶん。

「これでも喰らえー!」

男はゴムの様に赫子を伸ばし私の心臓目掛けて突く。

うーん…赫子は上手に使いこなせていますが、遅すぎですね。

クインケを横に振って赫子を弾く。

そのまま男に接近してその場で回転。手加減してクインケを男の頭に当てて気絶させる。

よし、無力化成功ですね。

私はクインケをしまい気絶している男達を道の隅に置く。

この人達どうしましょう。ここに置きつ放しつてわけにはいかないですし…

ツツ!?

私は自分に向けられた鋭い殺気に身構える。

この殺気、捜査官じゃない……喰種ですね。しかもかなり強い。「へえ、中々強そうな白鳩だね」

声が出た方を見ると、そこにはホッケーマスクを付けた男がいた。いつの間に……まるでホラー映画です。

男は右手の人差し指を親指で撫でながら近づいてくる。

男が一步踏み出すごとに空気が重くなり、肌がピリピリする。

並みの喰種やヒトなら恐怖で体を震わす程の殺気を受けて私は……

……怖い。

感心していた。

こんなに凄い人、初めて見ました。

それにとっても大きい人ですね。並大抵の攻撃じゃビクともしなそう。

「君みたいな白鳩がいるとはね。楽しくなりそうだあ」

彼はそう言うのとパキッと指を鳴らした。

……え、怖いです。何ですかその肉食獣が草食獣を見つけた時の「獲物はつけろん」みたいな目は！やめて下さい。

それと同時に彼の腰辺りから爬虫類の鱗ウロコの様な赫子が飛び出す。

鱗赫……甲赫のクインケ【出月】じゃ敵しいかな……

赫子には優劣があり、甲赫は鱗赫を苦手とします。それはクインケにも言えることで、甲赫である出月はあまり使いたくないです。

先程の鱗赫の男は大したことない人だったので良かったですがこの人は難しいですね。

折角手に入れたクインケを壊される訳にはいかないので、仕方ないですがここは赫子を出さないとダメみたいです。

私が赫子を出すと、彼の殺気が少し揺らいだ気がした。

あれ？隙……

「赫子……じゃあ君つはぐ……」

何か言おうとしていましたが先手を打たせてもらいます。

私は彼に肉薄して右手の掌底でスパーン！と顎を打ち抜く。

脳への強い衝撃で脳震盪を起こした彼は巨体に似合わずへたへたと倒れこむ。

あれ……意外です。簡単に決まりました。

どっとうしましょう。適当に戦って逃げる予定でしたがこのまま置いておくわけにもいきませんし。

私があたふたしていると、初めにクインケで吹っ飛ばした甲赫の男がふらふらと起き上がった。

「いてて…どうなったんだ俺、白鳩は！」

丁度良かったです。

私は彼の右足を持ち、ずるずると引きずりながら甲赫の男に近づく。

こちらに気がついた甲赫の男は生まれたての子鹿のように震えて尻餅をついた。

「そつそんな…ヤモリさんまでやられたなんて」

ヤモリ？このホツケーマスクの彼の名前でしようか…じゃあ、ヤモリさんとこの人は同じ仲間？

つと、それよりもこの人を安心させるほうが先ですね。

私が赫子を出すと、男は銅像の様に固まってしまった。

あれ…大丈夫ですか？

二度三度男の前で手を振ると我に返った男はビクンと体を震わせて立ち上がった。

「まさか、喰種だったなんて…もっ申し訳ねえ」

男は深々と頭を下げる。

喰種捜査官の様な姿をしていた私が悪いので、気にすることはないので…

「まさか、ヤモリさんまで気絶させるとはアンタ強いんだな」

褒めても何も出ませんよ。

あ、赫子なら出せます！

「つと、そろそろ行かねえと」

男はヤモリさんと鱗赫の男を担ごうとしたがよろけてしまった。

いくら喰種でも怪我をしていて二人を持つのは大変だと思えます。それにヤモリさんは大きいですから一人で運ぶのは難しそうです。

うーん……：……しようがないです。

私はヤモリさんを担ぎ、三步ほど歩くと後ろを振り向く。

男は少しの間ボーツとしていたが、我に返るとまた頭を下げた。

「アジトまで運んでくれるのか、すまねえ」

男はそう言うのと、鱗赫の男を担ぎ私の前を歩く。

数分ほど歩くと、私達の目の前に団地が見えてきた。

以前はヒトが住んでいたであろうそこは、今はもう見るも無残な姿になっている。

廃墟：確かにここならアジトにはぴったりですね。

私達がアジトの入口に近づくと喰種が何人か近づいてきた。

やっぱり皆さん同じ仮面に服装……ここまで統率が取れているということはかなり大きな組織なのでしょうか。

「帰ってきたか、誰だそいつ？」

「つな、ヤモリさんどうしたんだ！」

気を失っているヤモリさんを見て何人かの喰種が驚きや心配の声を挙げている。

これは……ヤモリさんを渡して直ぐに帰った方がいいですね。面倒臭いことが起きそうです。

私は、ヤモリさんを降ろし足早に去ろうとした。

「待て、お前がヤモリを倒したか？」

『たつタタラさん』

タタラさん？

声が出た方を向くと、そこには長身で白いコートを着た男が立っていた。

…目が怖いです。

「まさか、ヤモリを倒すほどの実力を持った喰種が十一区にいるとはな」

タタラと呼ばれた男は感心したように私を見ってくる。

えーと…隙を突いて顎をスパーンしたただけですから…そんな目で見ないで下さい。

照れます。

「クインケを持っているようだけど何か訳ありかな？」

「ツツ!？」

…この人…鋭い。



「冗談だ。余計な詮索はしないよ」

私はその言葉を聞いて少しだけ安心した。

いえ、隠す程のことではないのですが…

私の甲赫の赫子は少し珍しいタイプで鱗赫の様に流動的な動きができます。そのせいなのでしょうが、羽赫並に燃費が悪いのです…

あと私の…

「この人強いに決まってるよ。ねえ、SS級駆逐対象の赤鬼さん」

……私の目の前にはいつの間にか包帯で顔と体を巻いている少女がいた。

この子、気配がしなかった。

「赤鬼…道理で強いわけだな」

タタラさんがまたも感心している。

やめて下さい…そんなに大した事してないです。

タタラさんと包帯の子が何かをブツブツと話し合った後、包帯の子は「またね」と言つて何処かへ行ってしまった。

…またね? どういうことでしょう。

「赤鬼、もし良かったらアオギリの樹に入らないか?」

え…? 私は自分の耳を疑った。

## 幹部

『アオギリの樹』

ヒトと喰種を力で支配しようぜ！ヒヤッハー！な喰種組織。

ふざけてごめん。下っ端のオレ達にはあんまり詳しく話してくれないんだ。

でも、力で支配するっていう思想は正しいと思う。オレ達喰種が堂々と太陽の下を歩くには、偉い顔してるヒトをどうにかしねえといけないと思ってるからなあー。

「おい、知ってるか？」

「何がだよ」

いきなり声かけてくるからビックリしたじゃねーか。つてか主語が抜けてるぞ！それじゃあ何が聞きたいのかわかんねえだろ。常識ねえのかよ…。

「いや、俺とお前の仲だろ？わかってくれよ」

「いやいや。どういうこと？」

俺はお前のなんだよ！ やめろ！何だその「お前ならわかる！」つて目は！ わかんねえよ。

つていうかお前と知り合ってまだ一ヶ月位だよ？ お前の好きなタイプとか趣味と

か何も知らないよ。俺。

「ちなみに俺はお前の好きなタイプから身長体重。なんでも知ってるぞ」

「怖いです」

得意げな顔でピースするな。

お前怖いよ。どこで知った！っていかどうやって調べた！

「まあいいや、最近幹部が増えたって話だよ」

「よくねえけど、あぁー知ってるぞ。確か……赤鬼さんだっけか？」

「そうそう。まあ、会ったことないけどな」

「なー」

赤鬼さんがアオギリの樹に入った日に、俺とコイツは喰種捜査官の偵察に行っていたからよく知らないが、アオギリの樹の幹部であり十三区のジェイソンと恐れられているヤモリさん曰く。「あの人こそ強者だ。勝手を振る舞える人だ」だそうだ……どういこうと!?

え：ヤモリさんに何があったの！ いつものあの人は超が付くほどのDS&ワイルドな人なのに、あの時だけは何だか震えていたような気がした。

まあ、あの後「ヤモリさん震えてるんすか」って言った馬鹿が趣味の部屋という名の拷問部屋に連れて行かれたけどな。あの時のヤモリさん、輝いてたなー。

少し話がそれたな。俺達は赤鬼さんを直接見たわけじゃないが、見た奴等の話によると。

曰く「喰種なのにクインケを使う。赫子？知らん」

曰く「ノロさんみたいに無口。あと、ノロさんやタタラさん、ヤモリさんの近くに  
いるから話しかけづらい！ ちよつくら突撃してみるわ」

曰く「フードと仮面のせいで男なのか女なのかわからん」

曰く「最強」

うん……簡単にまとめると、よくわかってないって事だな。

一番下の奴なんか一言ってどういうことだよ。わかりやすい様でわかりにくいわ！

あと、二番目の奴。逝ってらっしゃい！ 骨くらいは拾ってやるよ。

でも、ノロさんやタタラさん……つまり幹部の人達と一緒にいるっていうのは近づきにくいなあ。

そして、一番重要な性別。ここがわかっていないのがイタイ。

なぜ重要か。十一区のアジトの女性不足が深刻なんです。

いや……まあエトさんがいるよ。でも、あの人小さいし、包帯でぐるぐる巻きだから顔もわからない。オマケにタタラさんとよく一緒にいるから話しかけれない。

だからさ……もし、赤鬼さんが女性なら……それはホント素晴らしいことなんだよな……

「おっおい…何泣いてんだよ」

「っ…すまねえ。色々と悲しくて」

「そうか。俺の胸で泣くといい」

「断固拒否する」

コイツも趣味の部屋に連れて行った方がいいと思う。

ついでにヤモリさんの相方でありヤモリLOVEのオカマ喰種であるニコさんを紹介するぞ。

まあ…赤鬼さんが女性なわけないな。そんな夢みたいな話があるわけがない。

「なあ」

はあ…どうして野郎しかいないんだろ。これからは女性の喰種も積極的に勧誘するほうがいいと思うんだよ。

「おーい、聴いてる?」

よし。そうなれば幹部のアヤトさんにでも相談してみようかな。あの人ちよつと怖いけど根は優しい人だし…

「おい! 返事しろよ」

「なんだよ!人が折角、これからのアオギリについて考えて…た…のに」

「……」

俺の目の前には、いつの間にか赤鬼さんがいた。

あれ……俺死んだ？

☆☆☆

私が何となくアジトの中を散歩していると、二人の喰種が何やら話していたので近づいてみた。

一人は私に気づきお辞儀をしたが、もう一人の方は何やら考え事をしている様でウンウンと唸っていた。

凄い集中力ですね。…相方さんが声をかけていますが聞いていないみたいです。

「なんだよ！ 人が折角、これからのアオギリについて話して……た……のに」

……いきなり怒鳴ったのでビックリしました。

でも、私を見ると段々と声が小さくなって最後にはガタガタと震えています。

どうしたのでしょうか？

「赤鬼さんすみません！ 今のは聞かなかったことにして下さい」

よくわかりませんが……わかりました。聞かなかったことにします。

私とその場を去ると後ろから「マジ助かったよおおおお」 「よしよし。俺の胸の中

で泣きなさい」って聞こえてきました。がそれも聞こえなかったことにします。

大きな組織なだけあって色々な人がいるんですね。

「お、」

数分ほど歩くと、後ろから声をかけられたので振り向く。

そこにはアオギリの樹の幹部であるアヤト君がポケットに手を突っ込みながら立っていた。

……ぱつと見。不良少年って感じですね。

でも、身長は私より少し高い位なので何だか可愛らしい少年です。

「アンタ、ヤモリを一発で倒したらしいな」

あー…あれは運が良かっただけです。たまたまあの人を隙を見せて、そこを狙ったら倒せた。それだけです。

「どうやってそこまで強くなったんだ？」

アヤト君が真剣な顔で訪ねてくる。

私からすれば、アヤト君は強いと思うのですが……事実アオギリの幹部ですし、まだ少年なのにそこまで強い人は見たことがありません。

焦らず、ゆっくり鍛えれば今よりもっと強くなれると思います。

「つち……だんまりか。ノロさんみたいな人だな」

アヤト君はそう言うのと私の横を通り過ぎて何処かへ行ってしまった。

……声。出してなかった。

こつ今度聞かれたら、ちゃんと答えるようにしないと。アヤト君にまで変な目で見られてしまいます。

アオギリの樹に入つて一週間ほど経ちますが、幹部の方々くらいにしか声をかけてもらえないんですよね……

何だか周りからの視線も気になります。「新参のくせに幹部とか調子に乗るな」って思われているのでしょうか。でも、幹部って決めたのはタタラさんですし……

はあ……そういえば。ヤモリさんは何処だろう？

私は耳を澄ませる。

私達喰種はヒトとは違い優れた五感を持っています。離れた場所にいるヒトや喰種の様子、人数、周囲の環境等を察知することができますのです。

ちよつと聞こえにくいけど、どうやらヤモリさんは離れのドームの様な場所にいますね。

ここからだとして少し遠いですが行ってみましょう。

歩くこと数分。離れについての私は扉を開けて中をキョロキョロと覗く。



ヤモリさんは何処でしょう…

「ソッフ…っ…ヤベエエエエエ。やべええええよお。ちよう。た〜のし〜！」  
……私はそつと扉を閉める。

お取り込み中でした。何も見なかったことにします。

ヤモリさんはいい人ですがちよつと変わっている人で、拷問が大好きなのです。

まあ、人の趣味をとやかく言う権利は私にはないので何も言いません。

うーん…ヤモリさんの拷問。まだ時間が掛かりそうですからノロさんの所に戻ろうかな。あの人も喋らないけど、何だか居心地がいいんですよね。

「あー兄イ。赤鬼さんだよ」

「ホントだ。赤鬼さんこんにちは」

ノロさんの所に戻ろうと来た道を引き返していると、幹部の瓶兄弟に挨拶されました。

……何故でしょう。先程から幹部の方にしか合っていない気がします。

「赤鬼さんって、ヤモリを一発で倒したんですよね？」

……デジャヴです。

あと、どうしてヤモリさんは呼び捨てなのに私はさん付けなのでしょう。

まだ組織に馴染めてないからかな……それとも他に理由があるのでしょうか。

「おい、赤鬼さんが困ってるだろ」

「ごめん兄ィ」

「俺に謝るな。謝るなら赤鬼さんだろ」

「赤鬼さんごめんなさい」

弟さんはそう言うのとペコリと頭を下げて「じゃあ、俺達は見回りに行くんで」と言つて近くの階段を走つて登つていった。

瓶さん達つて子供みたいで……可愛いです。

「あー！ 赤鬼さん！ ここにいましたか」

はあはあと息を切らしながら一人の喰種が走つてきた。

どうしたのでしょうか？

「タタラさんから幹部の皆さんに伝言です。そろそろ捜査官狩りを行う。という事だそうです」

……そうですか。

遂に始まるんですね。

私が窓の外を見ると、バケツをひっくり返したような雨が降っていた。

「あと……」

伝言を言いに来てくれた人が申し訳なきそうにしている。

まだ何かあるのでしょうか？

「赤鬼は二十区に行つて欲しい。とのことですよ」

……え

ドウシテ？

先程まで煩かつた雨の音が、消えたような感覚だった。

……貴方の為に運んだわけじゃないから

「クソ！ 寝坊した！」

枕元の時計を見ると十一時まで残り三十分。

本当だったら九時に起きる予定だったのに……こんなことなら深夜アニメなんて見るんじゃなかった。

いつもより少しお洒落な服を着て急いで家を出ると一目散にとあるお店に向かう。

「こんにちはー！」

「こんにちは」

途中。すれ違う人達に挨拶をするが、体力がない俺にはかなりキツイ行動だ。

でも、挨拶は大切だから。しっかりとっておかないと親父に怒られる……

急いで走っている俺は、何だか朝遅刻しそうになってパンを口に啜えて学校に向かうアニメの主人公みたいだ。

まあ、俺は主人公でも何でも無い只のモブだから、曲がり角で可愛い女の子にぶつかる事も突然現れた悪の組織から世界を守るなんてこともないんだけどな。

そんな事を考えながら走る事五分。

息も絶え絶えにお店に到着した俺は目の前に広がる長蛇の列に絶望する。

嘘だろ…まだ開店二十分前なのに……。

列の最後尾に着き、並んでいる人を見ると皆、男性ばかりで女性は五人ほどしかない。

三十人位いるだろうか、開店前からこんなに人が並ぶことなんてかなり珍しいことだ。

別にこの店限定のグッズが売っているわけでもない。有名人の握手会があるわけでもないし数量限定の何かを売るような店でもない。

アメリカ発のチェーン店、「ビックガール」。

老若男女、その名を知らぬ者はいないほど有名なステーキ店で、俺のオススメはビックハンバーグだ。

つと、今日は昼食を食べに来たのはオマケで俺の目的は別にある。

この店で働いているとある女性スタッフを一目見ようと、あわよくば料理を運んで貰おうと思ったからだ。

このお店で働いている女性スタッフは可愛い子が多い。つてか全員可愛い。

その中でも特に人気なのが大橋という苗字の女の子だ。

シヨートの黒髪を元気に揺らし、笑顔で接待する彼女に心を奪われた者は少ない。俺

もその中の一人だ。

だがしかし。俺の目的の子は大橋ちゃんではない！　そして、多分こいつ等も違うんだらうなあ。

俺は列に並んでいる人を見る。どれも顔がパツとしない……年齢〓彼女いない歴みたいなのばかりだ。

まあ、俺も彼女いないんだけどな……何だか悲しくなってきた。

コホン！　それで、俺の目的は最近入ったばかりの岸花という苗字の女の子だ。

その子は大橋ちゃんとは真逆の子らしく、挨拶の声は小さいし終始無表情。他の子が笑顔で接待しているにも関わらずだ。

普通ならそんな子。面接の時に落ちるんだろうが、なんと店側がその子をスカウトしたらしい。

つまりだ、岸花ちゃんはかなり可愛い！　いや、ただ可愛いだけではない！

俺はチラシに写っている彼女を見る。

『……貴方の為に、運んだわけじゃないから』

そんな見出しと共に上目遣いで写っている岸花ちゃん。

新雪の様に真っ白な肌。腰まである髪は白銀の様に輝いている。顔立ちは……パーフェクト！　文句の付け所がない。　生気のない目が少し気になるが、それも味があつ

て良いと思う。

そしてこのチラシ道理なら、岸花ちゃんは他の女性スタッフとは違いツンツンしているということだ。

それがお店の方針なのか、岸花ちゃんが元々そういう性格なのかは知らないがこれだけは言える。

岸花ちゃんは俺の嫁。

☆ ☆ ☆

「ふあ!？」

……い、今一瞬だけすごい寒気がしました。風邪かな？

私は額に手を当てるがどうも風邪ではないらしい。

きつと、疲れているんですね。ここ最近忙しかったですから。

……今すぐにも十一区に帰りたい。

私は誰にも聞かれないように深い溜息をつき。

「……臭い」

鼻いっぱい広がるこの吐き気を催す匂いにまた深い溜息をつく。

うう、タタラさんの頼みなんて聞かなければ良かった。

「捜査官狩りを行う」と知らされたあの日。私だけは何故か「二十区に行つて欲しい」と言われたので理由を聞きにタタラさんの所に行つたのです。

タタラさん曰く、「二十区の『あんでいく』という名前の喫茶店を見張つて欲しい」との事でした。

どうやら、そこにいる喰種が中々に面倒な人達が多く邪魔されると作戦に支障が出るらしいです。

面倒とはどういうことなのかはわかりませんが、私も一度だけあんでいくに行つたところがあるので場所はわかっていますし、見張るだけなら何とかかなると思ひ領いたのですが……

私は自分の姿が軽々と写つてしまふ鏡の前に立つ。

普段は履くことのない短いスカートに黒のハイソックス……恥ずかしいです。

周りを見渡せば私と同じ制服を着ている女の子達。

アメリカ発のチェーン店、『ビックガール』

私は今ここでスタッフとして働いています。



……運悪くこの店長さんに目を付けられて「是非ともウチで働いてくれ」と頼まれた私は、暫く二十区に居るならお金も稼げて丁度良いと思ひ領いてしまいました。

どんな仕事なのか確認しなかった私の行動は軽率でした。

お陰でこんな恥ずかしい服を着せられて、匂いを嗅ぐだけで吐きそうになるこんな場所です。

ですが、他の子達とは違い「笑顔でいなくてもいい」という事ですし、話し方も「このマニュアル通りに話してくれば大丈夫」とのことでしたので、無駄に神経を使わなくていいので幾分かは楽です。

……でもやっぱりこの匂いだけは我慢できません。気持ち悪い。

「岸花ちゃん大丈夫？ 何だか顔色悪いよ？」

一緒に働いている大橋さんが心配してくれて声をかけてくれました。

この子は面倒見が良くて明るくて……私とは全然違う子です。

「大丈夫」

喰種だからこの匂いのせいで気持ち悪くなっているんです。なんて言えませんからね。

耐えろ私。少しの辛抱……あれ？ そういえば、何時まで見張っていればいいのか聞いていませんでした。

ど、どうしましょう。

「無理はダメだよ？ よーし！ みんな開店時間だよ。今日も頑張ろう」

『おー！』

彼女が声をかけると、全員が右手を上げて反応する。

私も……色々と頑張ろう。

「沢山のヒト……」

私が店内を見渡せば、ヒトヒトヒト。全ての席がヒトで埋め尽くされていました。そして、どういう訳か殆どのヒトの視線が私に向けられています。

……気にしたら負けです。私はいつも通り注文を聞いて料理を運ばいいのです。

「……注文？」

すぐ近くの席で私を凝視していた若いヒトに聞く。

まだ注文する物が決まっていなかったのか、慌ててメニュー表を見た彼は直ぐに決まったようにメニュー表を閉じる。

「ビ、ビッグハンバーグを一つお願いします」

「……わかった」

「めっちゃ可愛いです！」

「そう」

ここに来るヒトは皆さん同じことを言いますね。

まあ、ヒトに褒められて嬉しくないことはないのですが、私が働き始めてもう何百回と聞いたセリフなので動じません。

馴れとは怖いものです。

「……………どうぞ」

「ありがとうございます！」

ジュウジュウと肉が焼ける音と不快な匂いのするビッグハンバーグ…… とてもじゃないですが口に入れたくないモノですね。

注文のビッグハンバーグを持っていくと男のヒトは何かを待っている様にジーツとこちらを見る。

……………はあ。

「……………貴方の為に、運んだわけじゃないから」

「うおおおお!!」

何故かこのセリフを言うと、ヒトは皆叫びます。

「……………迷惑。静かにして」

「す、すみません」

「……じゃあ私は行くから」

私はマニュアル通りのセリフを言い、彼にお辞儀をすることなく去る。

「ヤバイ、可愛い。俺の桃源郷はここにあったのか」

去り際に彼が変な事を言っていましたが無視です。

癒されたい……子供がいる席はどこでしょう？

私はキヨロキヨロと周りを見渡す。

しかし、世界は残酷なもので目に付くのは私を変な目で見ているヒトばかり……絶望です。

……貴方達の為に働いているわけじゃないですから。

☆ ☆ ☆

「……お疲れ様です」

「お疲れくまたね」

バイトの時間が終わり、大橋さんに挨拶した私はそのままの服装で喫茶店『あんてい』へと向かう。

普段着もあるのですが店長が、「君がウチの制服を着て外を歩いてくれれば宣伝効果抜群だよ！」という事でしたので仕方なく着ています。

あと……お客さんが増えたら給料も上げてくれるとのことでした。そっちが狙いです。

喰種は「欲しいモノがあつたら奪う」という考えの方が大半を占めていますが、私は「買えるなら買う」という考えです。変に事件を起こして目立つても嫌ですからね。

私が奪うのは喰種捜査官の人生だけ……くふ、アハハ……。

『あんでいく』に向かう途中で何人かのヒトに「一目惚れしました付き合ってください」「ハアハア、お願いです踏んで下さい」等と言われたので誰も見ていないのを確認して眠っていただきました。

それにしても月山さんといい先程のヒト達といい二十区は変な……

ドン！

「つ……」

「いてて」

私とぶつかった若いヒトは尻餅をついてしまった。

……何時もなら気づくはずなのに、前方不注意でした。

「大丈夫？」

「あ、はっはい！ 大丈夫です」

私が手を差し出すと私の手を取ることなく慌てて立ち上がった彼は、ペコリとお辞儀をして足早に去ってしまった。

……少しショックです。

ふと視線を下に向けると一冊の本が落ちていたので拾う。

「タイトル……虹のモノクロ」

彼の物でしょうか？ 私は読書をしないのでどういった本なのかはわかりませんが落とし物なら今度会った時に渡さないとはいけませんね。

私は本を手提げバックにしまい歩き出す。

数分ほど歩き『あんていく』に着いた私はドアを開ける。

「いらっしやい」

「こんばんは」

珈琲の良い香りと共に『あんていく』の店長である芳村さんが笑顔で出迎えてくれた。私は芳村さんの目の前に座り周りを見渡す。

もう少しで閉店なのか店内には私以外のお客さんはいない。

「今日もバイトだったのかい？」

「……はい」

私がそう答えると「それは大変だったね。お疲れ様」と芳村さんが言って、何時も私が頼む珈琲を出してくれた。

二十区に来てから毎日の様に『あんていく』に行くので芳村さんに顔を覚えられたのか最近をよく話しかけられます。

私としては放っておいて欲しいのですが、しょうがないです……

珈琲を一口飲み、何となくテレビを見ていると芳村さんがケーキを私の所に置く。

「……頼んでない」

「ああ、これは何時もバイトを頑張っている君に私からのプレゼントかな」

芳村さんは笑顔で答える。

とても嬉しいのですが……嬉しいのですが……

私は目の前に置かれたケーキを見る。

喰種は人肉しか食べられません。ヒトの食べ物を喰種である私が食べると吐き気を催すので食べたくないのですが……

チラリと芳村さんを見ると笑顔を崩さないまま私をずっと見ています。

食べるし……ないですね。

私はケーキを一口食べる。噛んでしまうと吐きそうになるのでそのまま飲み込み、何回か噛むふりをする。それでも、何とも言えない味が口の中に広がる。

「美味しいです……」

吐きそうです。でも、私が喰種だとバレると厄介なので我慢……我慢です。

「それは良かった」と芳村さんがまたも笑顔で答える。何でしよう悪意があるように見えます。

ケーキを食べ終わった私は珈琲を飲み干して珈琲の代金を払う。

「最近、物騒な事件が起きているから帰り道は気をつけてね」

「はい、また来ます」

『あんでいく』から出て数歩だけ歩く………トットイレは何処。

私は、全速力で駆け出した。



## ヤモリと赤鬼とオカマ

『九月中旬ですが暑いですね。今日は今話題の美少女ツンツンスタッフがいる噂の、アメリカ発のチエーン店ビックガールに来ています！ 早速ですが中に入ってみましょう！』

確かに暑いな。

『いらつしやいませー！』

『早速、元気が良くて可愛い子達がお出迎えしてくれました。でも、この中にはツンツンさんはいないようですね。すみませーん』

ツンツンさんって何だ？ いや、ツンツンってどういう意味だ？

『はーい？』

『あの、僕達○□テレビ局の者ですが、今話題になっっているツンツンしているスタッフを探しているのですがいますか？』

『あぁ〜……岸花ちゃんかな』

……岸花。

『ほうほう、岸花ちゃん？ その子は今何処に？』

『えーと……あ！ お店の奥で注文を聞いている子がそうですね』

『ありがとうございます。どうやらツンツンさんは奥の方で注文を聞いているようです。行ってみましょう！』

『すみませーん。貴女が岸花さんですか？』

『……はい』

『あ、そんなに警戒しないで下さい。僕達○□テレビ局の者です』

『そう』

『僕達、美少女ツンツンスタッフがいると聞いてやってきたのですが、貴女ですよね？』

『……違います。それでは』

『ちよ、ちよつと待つて下さい。ツンツンしていて可愛らしい。完璧に貴女のことですよっ…』

『……っ…』

『首を傾げているということは、どうやら本人は自覚がないようですね。』

『お客様の迷惑。帰って』

『ツンツンですね（笑）一応、店長さんとお客さんには許可を貰っているので大丈夫ですよ』

『……そう』

『そうで……』

プツン！

俺はテレビの電源を消す。

カタカタカタ。リモコンを持つ手が震えている。つふ……静まれ俺の右手。

カタカタカタカタカタカタ。

落ち着け俺！ 一旦落ち着け俺！ まずは深呼吸だ。吸つて吐いて……吸つて吐いて。

ふう、まずは状況整理からだ。

俺は誰だ？

久土正人。二十八歳。喰種対策局、英名は「Commission of Counter Ghoul」、通称CCGと呼ばれる国家機関の喰種捜査官だ。

今はSS級駆逐対象である「赤鬼」を捜査するために十一区支部へと来ている。

階級は准特等捜査官。相棒は広野。

来年に小学生になる息子と二人で暮らしている。

うむ、大丈夫だ。落ち着いた。落ち着いたぞ。

何故こんなに取り乱した？

お昼休みということでも何となくテレビをつけて自作した弁当をつまんでいると……テレビに岸花雪が映った。

岸花雪って誰？

息子の創多が世話になり、俺も一度だけ会った。その名の通り雪の様に綺麗な少女だ。

……あと彼女は喰種だ。

いや、訂正。彼女は人だと思う……喰種であるならわざわざ飲食店で働かない、しかも目立つようなことをするか？　しないと思う。だったら俺の勤は外れた事になる。

彼女が喰種でないのならそれでいいんだが、何だ。このモヤモヤした感じは。

「確かめに行くか……」

考えるよりまず行動。

彼女に会えばきつと何かわかるはずだ。

俺は先程テレビに映っていた彼女の姿を思い出す。

それにしても……可愛いな。

顔は元から可愛いのは知っていたが、ぴったりとした制服を着ている彼女は……なんだ、その……意外に胸が大きいんだな。見た感じDくらいあると思う。

それに、時よりスカートが揺れてそこから覗く白い肌も良いと思うぞ。

俺は何を考えているんだあああああああ！

これでは、女の子をいやらしい目で見ているそこらのオヤジと変わらないではないか！

くそ、冷静になれ久土正人。俺には愛おしい息子がいるだろ。親として手本を見せてやらねばならんだろうが！

ふう……疲れているのかもしれないな。

俺は『岸花雪に会いに行く』という考えを頭から除外する為に手元にある資料を見る。

『十一区の局員捜査官及び喰種捜査官数名が好戦的な喰種集団に襲われる』

最近、捜査官を狙う喰種達がいる。

襲ってくる喰種達は戦い慣れしているが、局員捜査官と喰種捜査官で連携してコレを撃退しているので死者はいない。

しかし、襲ってきた喰種集団の中に【ジェイソン】と【しっぽブラザーズ】らしき喰種が

混じっていたとの報告も受けた。

【ジェイソン】に「しつぽブラザーズ」どちらも危険で厄介な喰種だ。

もしもこいつ等が十一区にいるなら……苦戦は免れないだろうな。

俺は冷たくなった珈琲を一口啜る。

何だろうな……嫌な予感がする。

☆ ☆ ☆

「到着……暑いです」

私は目立たないように着ていたフード付きコートを脱ぐ。

九月中旬ということもあり、汗が服を濡らす。

まだまだ暑い日が続くのですが、コートを着なければいけない理由がありました。

どういう訳か、最近やけにヒトに声をかけられます。極力目立たないように、ヒトと話す時も必要最低限のことしか言わないようにしていますが、何故か喜ばれます。

ヒトは本当に不思議な生き物です。

コートを着ていた時も何故かジロジロ見られましたし……

ビックガールのバイトを午前中で終えた私は、久しぶりに十一区にあるアオギリの樹

アジトに帰ってきました。

勿論、宣伝の為にビックガールの制服を着たままで来ました。

……あ

別に制服じゃなくていいじゃないですか……私は何をやっているのでしょうか。

この暑さで冷静な判断ができなかったのかもしれない。そういうことになっておきます。

困りました。着替えたいのですが、生憎服はコートと制服しかありません。今から買っていくのも面倒ですし……仕方がありませんがこの格好でいきましょう。

アジトに続く森の中を歩く。湿った土や木の匂い……都会ではあまり嗅げない匂いです。

あまり良い匂いとは言えませんが、それでも働いている時に嗅ぐ匂いより数倍……いえ、何万倍もマシです。

私が帰ってきた理由は、何時まであんでいくを見張っていればいいのか聞くためです。

タタラさん……アジトにいるでしょうか。あの人時々いないことがあるので、もしいなくなったら困ります。

「女！ 止まれ！」

アジトの入口でアオギリの樹の方に止められました。

確かこの人は『これからのアオギリについて』考えていたとても良い人だったと思います。

「……なに？」

「何？ じゃないだろ女！ お前は喰種か？」

あれ？ 私とこの人は以前会ったはずですが……どういうことでしょう。

もしかして、合言葉か何かそれに近いものを言わないと通してもらえないのでしょうか？

うーん。困りました。

☆ ☆ ☆

「つち、ダンマリかよ。ノロさんや赤鬼さんじゃねえんだからよ。何か話せよ！ 殺すぞ」

オレは目の前の女が何も言わないことに腹を立てて怒鳴った。

しかし、女は沈黙を保ったままで一向に話す気配がない。



まったく、本当にノ口さんや赤鬼さんみたいじゃねえか。人に何か聞かれたら返す。常識だろ。

しっかしまあ……

俺は目の前の女を見る。

可愛いな。

腰まで届く真つ白な髪。汚れを知らない柔らかかそうな肌。顔もオレ好み……つてか全員が可愛いっていうレベルだ。

でも……女と視線が合うが直ぐに逸らす。

あの目は何だ？ 絶対ヤバイ！ 初めて女を見つけた時にアジトに近づいてきたから問答無用で殺そうと思ったが、あの目を見た瞬間。手を出したら殺されると思った。まった。

ちよつとチビったかもしれん。

一言で言うなら……『死』だな。わかりにくいなよな、でもあの目を直視しろつて言われたら絶対に嫌だつて答える。まだヤモリさんに喧嘩を売る方がマシだ。

…

……ごめんなさい。嘘です。どっちも嫌です。

と、兎に角。この女をどうにかして追い返さないと……

「……赤鬼」

「は、はい？」

オレの聞き間違えか？ 目の前の女の子が口を開いたと思つたら赤鬼つて……

「私、赤鬼。だから通して」

「ふああああああああああああああああ!!？」

「っ……」

「マジで？ お前……いえ、貴女が赤鬼さん？」

オレの質問に女の子は首をかしげる。

「うん？……赤鬼さん」

ま、マジかよ……マジかよ！ マジかよ！ ヒヤツハー！

俺は今猛烈に感動している！

赤鬼さんが、まさかの女！ しかも超絶美少女！ 俺は幸せだ。神よ感謝します。

マジかよ。やばい、マジかよ！ テンション上がってきた。

マジかよ……つてさつきからオレ、マジかよ連発しまくってるよ。マジかよ！

いや、これはマジテンション上がる！

ヒヤツハー！

オレの意識はそこで途切れた。

「おい！ 起きろ！ キスするぞ」

「あれ……」

目を開けるとオレの相棒が目の前にいた。

あと、気持ち悪いこと言うな。生憎だが俺にはソツチの趣味はない。

「あれ、オレは……」

「何寝てんだよ。こんな所を幹部の人に見られたらお前殺されるぞ」

「あ……ああ、すまん」

どうやらオレは見張りの途中で寝てしまっていたらしい。

何だ。顎の辺りが痛いし、頭もフラフラする。それに寝る前の記憶がない。

確か誰かにあつて……ダメだ。思い出せん。

かなり大事なことだと思っただけだなあ。

まあ、その内思い出すか。

☆ ☆ ☆

先程の人は何だったのでしょうか。

私が赤鬼と名乗ると、男の人はその場で小躍りしながら叫び声をあげたのでビックリしました。

思わず顎に掌底スパーン！しちゃった……

まあ、手加減してやったのでその内気づくでしょう。それよりもタタラさんです。

「あらあ、可愛らしい子ね。どうしたのお？」

「……ニコさん」

声をかけられたので振り向くと、ヤモリさんのパートナーのニコさんがいた。

「あら、私の名前を知っていることはアオギリの樹のメンバーかしら？」

ニコさんは女口調ですが、れっきとした男性の喰種です。

少しだけ変わっているだけです！

「うん、赤鬼」

「うっそ。アナタ赤鬼さん？ 私、鼻が利くから匂いで女の子ってのはわかってたけど、

まさかこんなに可愛い子が赤鬼だなんてねえ」

「……タタラさんいる？」

「タタラっち？ 今日是用事があるみたいでアジトには来てないわねえ」

「……そう」

残念です。またの機会に聞くことにしましょう。

折角アジトに来たので、ヤモリさんに会いに行こうかな。

「……ヤモリさん」

「あら、ヤモリのところに行きたいの？」

「うん」

「丁度良かったわ。私もヤモリの所に行こうと思っていたのよ。一緒に行きましょう」

ニコさんはそう言って階段を上がっていった。

私達が屋上に着くと、沈みかけの太陽と重なるようにヤモリさんが座っていた。

あれ、ヤモリさん元気ない？

今日のヤモリさんの背中では、随分と小さく感じた。

「……ヤモリどうしたの？」

ニコさんも何時ものヤモリさんと違う雰囲気気づいたのか、心配そうに声をかける。

「……少し。母親の事、思い出してた」

……

「一体どれだけの喰種がなにかを失わずにいられるんだろう。別に感傷になんて浸る気はないけど……強くないと奪われるばっかだ」

「……ヤモリ」

「あ、赤鬼ちゃん!」

私は、後ろからヤモリを抱きしめた。

といつてもヤモリは大きいから抱きしめるといふより抱きついた感じになりましたが…

抱きしめた理由なんて無いです。何となく、本当に何となくです。

「き、君が赤鬼?」

ヤモリ、少し動揺しています。心音が不規則になりました。

「うん……赤鬼」

「そうか、君が……君は強いね。僕なんかより……ずっと強い」

……そんなことない。

「ふふ、赤鬼ちゃんって意外に大胆なのね。じゃあ、私も……」

そう言つてニコさんはヤモリの右側に行き。

両手を広げた。

「ヤモリ! 仕方ないから抱かせてあげるわよ!」

「激しくいらな~い」

ヤモリ、即答でした。

あと、ニコさん何言つてるんですか……ちよつと怖いです。

「だってニコ、ヒゲが当たりそうだもん」

「んもう！ つれないのね…」

『アハハ』

ニコさんとヤモリは楽しそうに笑う。

……温かい。

でも。

「……奪われる。アイツ等から……ならワタシは…守る。だから、ワタシは殺す。」

『赤鬼（ちゃん）？』

「あはは、アハ。アハハハハハハハ」

☆ ☆ ☆

一瞬誰かわからなかったわ。

あの無口でクールな赤鬼ちゃんがまさかあんな風に喋って笑うなんて……

それに……凄まじい狂気ね。

気を抜いたら一瞬で狂気に支配されるところだったわ。

この子に一体何があったのかしら……いえ、愚問ね。何かがあったからこそ、この子は歪んでしまったのね。CCGに捕まって拷問を受けたヤモリの様に……

あら、そういえば。

私はヤモリと赤鬼ちゃんを見る。

「そうだね。僕も殺る気が出てきたよ」

「アハハ。ワタシも、こんなに気持ちが高ぶったのは久しぶり」

ふふ、何だか似た者同士ね。

ゾクゾクするわあ。



## 始まり

『二十八日。高田ビル通りで男性の遺体の一部が発見されました。

現場には喰種のものと思われる体液が残されており、捜査局はこれを喰種の捕食と見て周辺調査を開始しています』

私が十一区から二十区に帰ってきた翌日。

二十区で喰種による捕食が行われたようです。

私は二十区の喰種のことはよくわからないので誰が襲ったのかは知りませんし、興味もありません。

正直、他の区の喰種が何をしようが私の知ったことではありません。干渉する気もありません。

でも、喰種捜査官を殺すことはお手伝いしますよ。それはもう喜んで……と言いたいところですが、最近クインケ【出月】の調子が悪いですよね。

展開は一応できるのですが、ギミックの切り替えがどうもがたがたするんですよね。時々、切り替わらない時もありますし……使いすぎなのかな？

でも、ここ最近使っていないけどなあ。どこか故障したのかもしれないね。

兎に角、これからは赫子を積極的に使うしかないですね。

幸いなことに二十区にはまだ本部の喰種捜査官はいないので、局員捜査官程度なら素手で殺せます。

まあ、私の二十区でのお仕事は『あんていくの見張り』ですから滅多なことがなければ殺しませんけどね。

私は珈琲を一口啜り、辺りを見渡す。

あんていくの従業員は店長の芳村さんとトーカーさんという片目を黒髪で隠した女の子。

トーカーさん……何だかアヤト君に似ていますね。

まあ、今はどうでもいいです。

今日のお客さんは六人。その内喰種だと分かる人は……二人。血の匂いが僅かに残っています。

そして確実にヒトだとわかるのは、私の後ろでこちらを見ている若い二人ですね。

無知で平和な顔をしています。羨ましいですね。

ん……

私を見ている二人の内の黒髪のヒト……どこかで会ったような……

思い出しました。

この前、私とぶつかって本を落としてそのまま去ってしまったヒトです。会えて良かった。彼に渡そうと思ってずっと本を持っていて正解でした。

「これ、前に拾った」

「あ、ありがとうございます！　ずっと探していたんです。ほんとありがとうございます」

私は彼の前まで行き本を差し出すと、彼は大事そうに本を抱えた。

本が好きなんですね。

私もあの子達に絵本などを……いえ、やめましょう。

「気にしない。じゃあ……」

私は自分の席に戻ろうとすると不意に視線を感じる。

この視線……黒髪の彼の横のツンツン頭で活発そうな彼からですね。

私はツンツン頭の彼を見る。

目が合うと逸らされてしまいましたでしたが気にしません。私と目が合うと殆どのヒトが逸らすのもう馴れました。

「……何か？」

「あ、いや。君ってビックガールの岸花ちゃんだよな？」

「はい……」

「やっぱり！ 岸花ちゃんは彼氏いるんですか？」

「ツ!？」

ツンツン頭の彼がいきなり立ち上がり私の手を取る。

私の手を包む暖かい手……離して欲しいですね。

あと、何を聞いているのでしょうか。

「ひ、ヒデ！ いきなり何してんだよ」

「うっせーカネキ。こういうのは積極的な方がいいんだよ」

ふーん。

黒髪の彼がカネキという名前で今も私の手を握っているツンツン頭の彼の名前がヒデですか。

ヒデさん、積極的なのは良いことだと思います。私も貴方の様にズバツと言えたらいいのですが、生憎無口なのは元からなので……あ、気分が高揚するとちゃんと喋れました。

まあ、そろそろ手を離してもらいましょう。

正直。触られるのは嫌いです。

「彼氏。いません」

「マジですか！　じゃあ今度お茶でもどうつすか？」

「ひ、ヒデー！」

「調子に乗らないで、それじゃあ」

私はヒデさんの手を振りほどき元の席に戻る。

ヒデさんもそこら辺にいるヒトと変わらないですね。彼等は事あるごとに「お茶どうですか？」「メルアド教えて〜」「付き合って下さい」それしか言いません。本当に単純。

ヒデさんの様な友達を持ったカネキさんの苦勞が見えます。

でも…

私はヒデさんとカネキさんの方をチラリと見る。

「ひ、ヒデー！　変なことするなよ！」

「いや〜、悪い悪い。今度何か奢ってやるから」

「つたく…」

そう言つて笑い合う二人。

ヒデさんとカネキさんはとても良い関係を築けていると思います。

例えるならヤモリとニコさんのような感じですかね。

さてと、今日も何事もない感じですね。

私は珈琲の代金を芳村さんに払い、ドアノブに手をかけようとすると……カラン。とドアが開いた。

「あら……」

「……」

入ってきたのは綺麗な女性だった。

私は彼女にペコリとお辞儀をしてそのまま横を通り過ぎる。

……臭い。

彼女から、ヒトの血の匂いがした。

☆ ☆ ☆

今日は一日ビックガールでバイトです……

頑張れ私……主にこの不快な匂いとお客さんの対応に……早速お客さんですね。

「いらっしや……」

「や、やあ」

……最悪です。何故ここに貴方がいるのでしょうか。

久土正人。

「えーと……この前テレビで雪ちゃん映っててさ、そのことを創多に話したら会いに行きたいつて言ってな……」

創多君！

懐かしいですね。創多君がいるなら久土正人、貴方は用済みです。帰ってくれて結構です。

ですが、創多君の姿が見当たりませんね。どこでしょう。

私はキョロキョロと周りを見渡すが、創多君らしき子がいません。

「でも、風邪を引いちまってな……隣のおばさんに創多の看病を任せて俺だけ来たつてわけだ」

「帰って」

貴方は何をしているのでしょうか。息子である創多君が風邪を引いて苦しんでいるにも関わらず、看病を他のヒトに任せて自分だけここに来た……

貴方も捜査官ですね。あの時、喰種の子供の為に怒ってくれたので見逃してあげましたが、殺しておけば良かったかもしれません。

「ちよ、ちよつと待ってくれ」

「なに？」

そう言つて久土正人はポケットから星型のネックレスを取り出す。

形からして手作りでしょうか？

「これ、創多が君の為に作ったんだ。どうしても今日渡したかつたらしくてな、それで持ってきたんだ」

「……そう」

私は久土正人からネックレスを受け取り付ける。

……嬉しいです。

「この前はありがとう。だつてさ、じゃあ俺はこれで」

「……席に付いたなら何か食べてって」

「え？ でも、帰れって……」

「……食べていけ」

「あ、はい」

私は久土正人にお水とおしぼりを持って行くと久土正人は私をジーツと見つめてい  
る。

「何？」



「いや…制服、似合ってる。可愛いよ。」

「……そう。注文決まった？」

久土正人。貴方もそこら辺のヒトと変わりません。

「んー、じゃあビッグハンバーグで」

「わかった」

そういえば、久土正人は私が喰種だと気付いているはず。

何故、他の捜査官に私が喰種だと知らせない……殺そうとしない。

もしかして、私の思い過ごし？

私は久土正人を見る。

「ん？ どうした」

「……何でもない」

どうやら思い過ごしみたいですわね。

でも、警戒しておくに越したことはないので気をつけましょう。

はあ、今日は大変な一日になりそうです。

☆ ☆ ☆

……大変な一日でした。

久土正人。貴方と親しげに話したせいで職場の皆さんに付き合っていると勘違いされました。

誰が好き好んで喰種捜査官と付き合いますか……殺しますよ。

まあ、大変な一日でしたが良かったこともあります。

私は首に掛けてある星型のネックレスを見る。

創多君からのプレゼント、本当に嬉しいです。今度お返ししないといけませんね。

そうなる……創多君の好きな動物とか乗り物とかを久土正人に聞かないといけませんね。

久土正人と話すなんて嫌ですが、仕方ないです。創多君の為です。

私が住宅街を歩いていると、前からカネキさんが女性の方を連れて歩いてきた。

確かあの女性の方は、あんていくの入口ですれ違った人ですね。

「——リゼさんAB型なんですか？ 僕もなんですよ」

「本当ですか？ 奇遇ですねっ」

カネキさんとリゼと呼ばれた女性は私に気づくことなく横を通り過ぎる。

カネキさん、お話を夢中で周りが見えなくなっていましたね。色々と無警戒です。

カネキさん……人生に一度しか体験できないことを貴方は今からするので。隣で

楽しそうに笑っている彼女の手によつて。

リゼと呼ばれた人は喰種です。貴方は多分ですが、今日彼女に喰われます。

彼女に喰われる瞬間。貴方はきつと絶望のどん底に叩きつけられることでしょう。

ふふ、別にカネキさんとは親しいわけでもないのに私は何を考えているのでしょうか。

カネキさんを助ける。なんて選択肢は私にはありません。

私は振り返りカネキさんとリゼさんの後ろ姿が暗闇によつて見えなくなるまで見送る。

さようなら。

## 悲劇

『少女に臓器提供の意思はあったんですか!?』

『遺族への確認はありましたか!?』

『彼女は見殺しですか?! 医師として死力を……』

私はテレビから視線を逸らし店内の掃除をする。

最近、このニュースばかりですね。何回も同じニュースを流されても飽きるだけです。

どうせ流すならもつと為になるニュースを流して欲しいです。

……それにしても、臓器移植の事件の発端は二十区の鉄骨落下事件だと聞きました。

なんでも、二人の大学生が犠牲になつたらしく、女子学生の方は即死。男子学生も瀕死の重体で直ぐにでも臓器を移植しないと助からない状態だったそうです。

そこで、今ニュースで出ている嘉納かのう教授という方が独断で即死した女子学生の臓器を男子学生に移植したそうです。

うーん……私が医者ならこの嘉納というヒトと同じことをしたと思います。

助けられるなら助ける。あ、勿論喰種捜査官なら殺します。

私は逆に嘉納教授を責めているヒトに聞きたい。『お前達は、目の前で死にかけているヒトを見殺しにする勇氣があるの？ 決断できるの？』と……

まあ、このヒト達では無理ですね。

「仮にどちらの学生も死んでしまつたらこのヒト達は『助けられる命だつたはずでは!? 見殺しですか!?!』等と言うはずです。」

くだらない。

……そして、この汚れが落ちないです!

何これ、喰種の力を持つてしても落さないなんて、予想外です。

「岸花ちゃん、大丈夫?」

私がテーブルに付いた黒いシミを落とすのに苦戦していると、カウンターの掃除が終わった大橋さんが手伝いに来てくれました。

助かりました。本当にこの子は優しいですね。

「……岸花ちゃん。フキン、濡れてないよ」

「……」

「もう、岸花ちゃんはおつちよこちよいだなく」

「……………めん」

恥ずかしいです。穴があつたら入りたい。

うむむ、考えることに夢中になって周りが見えなくなっているとは……これではどこかの誰かさんのことも悪く言えませんね。反省です。

「岸花ちゃんつてき、嬉しい時とか悲しい時、どんな顔するの?」

「……?」

「あ、悪口じゃないよ。ただ、何時も同じ表情だからどうなのかなーつて」

「……わからない」

「わからない?」

私にも喜怒哀楽はあります。

でも、顔に出ないんです。

いえ、出し方がわからないと言った方がいいのかもしれない。

あ、でも気分が高揚するときは笑えていると思います……多分ですけど

プニ

「ツ!?!」

「うん、岸花ちゃんは笑うと可愛いよ! ほらニコー!」

そう言つて大橋さんは私の頬つぺたをプニプニする。

……や、やめて欲しいです。恥ずかしいです。

「やめて……」

「ありや？ 怒っちゃった？ ごめんね〜」

大橋さんはそう言っただけでどこかに行ってしまった。

営業時間になり続々と店内にヒトが入ってきてきます。

今日も一日頑張りますよ……色々と……

私は自分に向けられる視線を無視して一つの席に向かう。

「注文……」

「あ、岸花ちゃんじゃーん！ ほらカネキ！ 一番人気の岸花ちゃんが注文を聞きに来てくれたぞー！」

「どうも」

「カネキ！ 退院早々運いいなく岸花ちゃんに会えるなんて」

「はいはい、岸花さんごめんね」

「……」

私に向かった席にはカネキさんとヒデさんがいた。

カネキさんが生きている。

どうして？ あの日彼女に喰われなかった？ それとも、何か別の理由が……

そういえば、ヒデさんは退院早々と言いました。という事はカネキさんは入院していた……『二十区の鉄骨落下事故』『学生二人が犠牲』『男子学生は助かった』そしてカネキさん達とあつた日に事件が起きた。

もしかして、鉄骨落下事故の被害者はカネキさん？　そして鉄骨の下敷きになり即死したという女子学生はリゼさん。

……つまり喰種である彼女の臓器をヒトであるカネキさんに移植した。もしそれが本当ならカネキさんは……どちら側なのでしょう。

「岸花ちゃん？」

「……何？」

「いや、ブーツとしてたからさ。注文いい？」

「どうぞ」

「じゃ、ビッグハンバーグふたつ！　あ、やっぱり俺は目玉焼きの方で」  
「わかった」

——十分後。

……やっぱりこの匂いは嫌いです。



私は、カネキさん達が注文したビッグハンバーグと目玉焼きハンバーグを持っていく。

「お、カネキ来たぜ！」

「……貴方達の為に運んだわけじゃないから」

「ひゅううううううううう！ 可愛い」

「ひ、ヒデ！ 静かにしろ」

全くです。

他のお客さんもいるのもう少し静かにしてもらいたいです。

「じゃんじゃん食おうぜ！」

ヒデさんはそう言ってバクバクと食べ始める。

美味しそうに食べていますが、見てる私は吐きそうになります。

直ぐにでも違うお客さんのところに行きたいのですが、カネキさんが喰種かヒトか確かめる必要があるので我慢します。

「……？ 食わねーの？」

「お……おう……」

ヒデさんに言われてカネキさんも食べ始めましたが……全く箸が進んでいませんね。

もしかして……本当にカネキさんは喰種になったのでしょうか？



## 笛口

「……到着」

午前中でビックガールのバイトを終えた私は、喫茶店あんでいくに来ていた。ドアを開けて店内を見渡す。

今日も従業員並びに喰種のお客さんに不審な動きはないですね。

強いて言えば……

「い、いらつしやいませ」

「……」

ゲロキさん……失礼、カネキさんがあんでいくの従業員になったということでしょうか。

これでハッキリしました。

カネキさん、貴方は私達側ですね。

いえ、私達側に近づいていると言った方がいいのかもしれない。

まだ少しヒトの匂いがしますが、喰種の匂いもします。

「あ、あの……注文は？」

「……いつもの」

「はっはい！ わかりました」

カネキさんは逃げるようにカウンターに向かう。

「いつもの」と言ってしまうましたがカネキさんは珈琲を作れるのでしょいか……心配です。

「アンタ、あの人と何かあったの？ すっごい睨んでたけど」

「べ、別に………たいした事してないよ」

私はテーブル席に座りぼんやりと店内を眺めていると、カネキさんとトーカさんの会話が聞こえる。

……ほう。

私のスカートに吐瀉物吐いておきながら『たいした事してないよ』ですか。

あの日私がどれだけ……どれだけ……

ふっふふふ……アハハ。

カネキさあああん、帰り道は気をつけてくださいねえ。

油断していると頭と体がサヨナラしちゃいますよ。

「お、お待たせしました」

「……ありがと」

私はカネキさんが作った珈琲の香りを嗅ぎ一口飲む。

……普通。

えーと、普通以外に何も言えないです。

カランカラン。

私が珈琲を飲んでいるとドアが開く音がする。

反射的にドアの方へと視線を向けると、黒髪で優しそうな雰囲気の女性と、その影に隠れるように花柄のカチューシャを付けた女の子が入ってきた。

あの二人は親子ですね。

顔立ち、雰囲気がどことなく似ています。

「いらっしやいませー」

「あら……新人さん?」

あの女性、カネキさんを見て「新人さん?」と聞いているということは常連のお客さんでしょうか。

でも、私がここに来てから一度もあつたことありませんし……単純に時間が合わなかった?

「笛口です。ほら……ヒナミもご挨拶なさい」

あの女性は笛口という苗字の方で、女の子の名前はヒナミちゃんですか。

「こんにちは……」

笛口さんに言われたヒナミちゃんは恥ずかしがりながら小さな声でそう言った。

ヒナミちゃんは人見知りなのでしょうか……可愛いですね。

「リョーコさん——」「こんにちは——」

笛口さんはリョーコさんという名前なのでしようか。

小さな声で話しているのでここからでははつきり聞こえません。

トーカさんと笛口さんが話を終えると、笛口さんはヒナミちゃんを連れて奥にある階段を登っていった。

……気になりますが特に警戒することはないでしょう。

「……ちそうさま」

「はっはい！　ありがとうございます……」

珈琲を飲み終えた私はカネキさんに珈琲代を渡す。

カネキさん、凄いビクビクしていますね。

うーん……

「……たいした事してないよ」

「ツ!？」

私がそう言うと、カネキさんは銅像の様にピシリと固まる。

ふふ、お返しです。

「じゃあね……」

私は固まっっているカネキさんの横を通り過ぎあんていくを後にした。

☆☆☆

「こんな時間……」

近くにあつた時計を見ると、あと数分で0時になる所だった。

急いで帰らないと……私は少し歩調を早めて家に向かう。

こんな時間になるまで家に帰れなかったのには理由があります。

あんていくを出した後、誰かにずっと後を付けられていたんですよね。

付けていたのは喰種だったので気絶させてさっさと帰れたのですが……ヒトが多くてできなかつたんです。

……今度付けられたら殺そう。

私は近道するために裏路地へと入る。

数分ほど歩くと、前方からヒトの気配がした。

裏路地でこの時間帯……怪しいですね。

私は立ち止まり耳を澄ませる。

人数は二人……この足運びに体格。

そして……アタツシユケース……間違いありません、この先に喰種捜査官がいます。

二十区には喰種捜査官はいなかったはず、他の区からの見回り？

それとも二十区に配属された？

どちらにしても、私には何も出来ませんね……悔しいです。

アレ等を殺すことは簡単です。

ですが殺した後が問題なのです。

二十区で捜査官が喰種に殺された！

二十区には捜査官を殺す危ない喰種がいる！

よし、調査だ！

こんな感じで二十区に捜査官が沢山来られると、ここに住んでいる喰種の皆さんに迷惑がかかりますからね。

私のように他の区に家があるなら問題ありませんが……多分ないでしょう。

さて、どんな捜査官が見ておくことにしましょう。

顔がわかれば色々調べやすいですし、対処できます。

私は気配を殺し少しずつ近づく。



「――襲われて」「ああ、そうでしたか……」

普通に会話している様ですが、かなり警戒していますね。

これでは顔を見ることができません。

ギリギリまで近づいた私は耳を澄ませる。

声色からして若いヒトと少し老けたヒトですね……

あと、近くに喰種の死体も一つ転がっています。

恐らく捜査官に殺されたのでしょう。

どうしてこの区に捜査官が来たのかはわかりませんが、声だけわかれば何とかかなります。

さてと、見つかる前に帰りましょう。

私とその場を離れようとすると

「極めて愚劣な喰種ですね」

若い喰種捜査官がそんなことを言った。

ふふっ……面白いこと言いますね。

……  
コロス。

## 尾行

「クロス……」

私は赫子を出しながら小さく呟く。

自分の感情が高ぶり、感覚が研ぎ澄まされていく。

感覚が研ぎ澄まされたことにより瞬時に周囲の情報が私の脳内へと伝わる。

標的は……二つ。クインケは収納状態。

若い捜査官は周囲を警戒しているけど、この程度なら姿を見られずに一瞬で殺せる。

だけでもう一人の捜査官……こっちはちよつと殺すの大変。

一見、無警戒のように見えるけど隙がない。かなりの修羅場を潜ってきた捜査官です

ね。

でも、クインケを地面に置いているから瞬時に展開することは不可能。

よつてどちらにも楽に殺すことは可能。

若い捜査官は後回しにして初めに少し老けた捜査官を殺しましょう。

「ふふ……」

久しぶりですねえ。

私はマスクを被り彼等の方へと歩いて行く。

「あつ……」

私は重大なミスを犯したことに気づき立ち止まる。

この服……ビックガールの制服でした。

ここ、困りました。こんな姿では殺せません……何か羽織れるものは……

私は辺りを見渡すが空き瓶や紙くずが落ちているだけだった。

うぐぐ……悔しいですが、今回は見逃してあげます。

捜査官達に気づかれぬように来た道に戻る。

そういえば、私と捜査官二人の他にもう一人、喰種の気配がしましたが……まあ気にする程のことでもないですね。

☆ ☆ ☆

喰種捜査官が二十区に来て数日。

私は何度か彼等を尾行してわかったことがあります。

どうやら彼等は喰種を追ってこの二十区に来たようですね。

そして……

街灯の明かりが灯り始めた少し寂しげな住宅地。

私は物陰から顔を少し出して前にいる二人の局員捜査官を見る。

メガネをかけているのが草場というヒトで、無精ヒゲの短髪が中島。

彼等が喰種捜査官の手伝いをしているということは、ここ数日調べてわかっていました。

つまり、この二人の後を追えば調べている人物を特定できるということです。

「草場、いたぞ」

「はい」

どうやら見つけたようですね。

私は中島さん達が見ている人物を見る。

そこには、一人で住宅地を歩いている笛口さんがいた。

まさか笛口さんが捜査官達に追われているなんて……そんな人には見えませんが

……

まあ、追われている理由は何でもいいのです。

どうせ、何もしていなくても喰種だから私たちはずっと捜査官に追われる……

む……笛口さんの後ろから男の人が近づいて来ましたね。

私は耳を澄ませる。

「四方くん——」「送ります——」

ふむ、どうやらあの男性は四方という人のようですね。

少しだけ会話をする、笛口さんは四方さんが乗ってきた車に乗り走り去る。

……助手席にカネキさんがいた様な気がしましたが気のせいですね。

「戻るか」

「はい」

笛口さんを尾行していた中島さん達も帰るようですね。

私も帰るとしましょう。

「おやおや、もうお帰りですか?」

「ツ!?!」

私は声が聞こえた方を見る。

そこには、白髪でやせ細った男が立っていた。

いつの間に……それよりも、こんなに接近されていたのに気づかなかつたなんて……

「ああ……名を名乗るのを忘れていたよ。私は真戸というんだ」

「……」

知っています。

真戸呉緒上等捜査官。上等捜査官ですがクインケの扱いや喰種の捜査は並みの捜査官よりも上だと聞きました。

そして、喰種に対してかなりの憎悪を持っていると……

「だんまりか……岸花雪、調べた通りの無口な少女のようだねえ」

「……名前、何で知っている？」

「このところ誰かに見られているような気がしてね。それで探りを入れてみたら君が私達を嗅ぎまわっているじゃないか。君のように麗しい少女が尾行とは感心しないねえ」

「……私の勝手」

「結構結構、だが何故私たちを尾行していたかは聞かせてもらおうよ」

「……この後バイトがあるから帰る」

色々と不味いですね。

何とかこれで……

「心配しなくても時間はとらせない」

「でも……」

「五分でいい。五分あれば十分だ」

失敗した……

私はいつでも動けるように体に力を入れる。

どうしましょう、今の私の状況はかなり不味いです。

真戸さんは私のことを調べたと言いました。

つまり、私が赤鬼であることもわかった筈……いえ、それは大丈夫ですね。

その辺りの誤魔化しは月山さんに協力してもらって完璧な筈です。

現に今までバレずに生活できたのですから……

「岸花雪ではなく『赤鬼』と呼んだ方が良かったかな？」

「ツ……」

「ああ、誤解しないでほしい。先程も言ったが、私は君と話がしたいだけだ」

バレてました。

どうやら、私は捜査官達を甘く見ていたようですね。

どうやって私の正体を知ったとか、何で攻撃しないで私に話しかけてきたのとか関係ない。

……真戸さんにはここで死んでもらいますよう。



私は真戸さんの首目掛けて赫子を振るう。

ゴオオオオオという空気を切り裂く音。

あと数ミリで真戸さんの首が吹き飛ぶ……

「どうして避けない……ですか」

私は赫子を止める。

当たれば一瞬で首が切れる威力を持っている私の赫子を前にしても、真戸さんは避けるどころか微動だにしなかった。

「私は君と話がしたいだけだ……ああ、すまない、答えになっていなかったねえ。君は赫子を止めると思った。ただそれだけだ」

「そう……」

何だか……とても変わっている捜査官ですね。

それに、意外です。

まさか私の正体を知っていないながら何もしないでただ私と話をしに来ただなんて……

「さて、単刀直入に聞こう。昨年起きた○△保育園の事件だが捜査官を殺したのは君か？」

「そう」

真戸さんは話が終わった後に殺すので、もう誤魔化す必要もないですね

話を聞いているのは何となくです。

「ふむ……では児童を殺したのも君か？」

「違うツ!!」

私はすぐに否定する。

捜査官を殺したのは私ですが、子供たちを殺したのは……殺したのはツ!!

「ふむ……時間だ、私は支部に帰るとするよ」

「え……」

「私が帰らないと亜門くんが心配するからねえ……」

「あの……」

「ああ、君の正体は誰にも言わんさ……」

私が呆然としてしていると、真戸さんは手を挙げて暗闇へと姿を消していった。

な、何がどうなっているのでしょうか……

はあ、帰りましょう。

何となく空を見上げると、満月が私を優しく照らしていた。

## それぞれの想い

「岸花雪……か」

とある喰種を追って二十区へとやってきた真戸呉夫上等捜査官は、先程出会った白髪の少女の事について考えていた。

汚れを知らぬ純白の肌に腰まで届く長髪。顔立ちは整っており、彼女が笑えば男女間わず虜にしまうであろう。

しかし彼女の顔は氷の様に固まり、面の様に表情を変えることはなかった。

そして、彼女の瞳は血の様に真っ赤に染まっていた。

知っている者が見ればひと目でわかる彼女の瞳は『赫眼』。人の血肉を喰らう化物である喰種特有のものであった。

そして、とある喰種によつて妻を殺された真戸は『喰種』という単語を聞いただけで虫唾が走り、『喰種』が私達人間の様に生活しているだけで今すぐにも殺してやりたいという強い衝動にかられた。

真戸の心は喰種に対する憎悪で満たされていたのだ。

しかし、彼は岸花雪を見逃した。

普通の彼であれば喰種を見逃すなどありえないのだが、どうしても確かめたいことがあったのだ。

昨年十二月に起きた○△保育園襲撃事件。

一人の喰種が○△保育園に侵入、児童及び職員全員が殺された。

現場に駆けつけた宇良准特等捜査官以下十五名の捜査官も全員死亡。

宇良准特等捜査官が最後の無線で『赤い……鬼だ……』という発言により、対象を「赤鬼」と呼ぶことにした。

そして、児童並びに職員を殺したその残酷性と一度に喰種捜査官を十六名殺したその驚異性により「赤鬼」をレートSSに認定した。

これが○△保育園襲撃事件と赤鬼の記録である。

別にどこもおかしくはない、むしろ簡潔にまとめであり赤鬼がどれだけ残酷で危険な存在なのかとてもわかりやすく書かれていた。

何人もの喰種捜査官が赤鬼の捜査をさせてくれと本部に頼み込んだが、既に捜査担当が決まっていたらしく断られてしまった。

その内の一人であった真戸はどうしても諦められず、独自に赤鬼について調べていた。

しかし、真戸が幾ら調査しても赤鬼についてはわかることは般若の面を被っている事だ

けだった。

赤鬼についての情報が少な過ぎたのだ。

いくら長年培ってきた捜査官の経験も、般若の仮面一つでは無理があった。

それではと、真戸は見方を変えて赤鬼と交戦した捜査官たちや犠牲になった園児たちについて調べることにした。

そして真戸は一人の少女にたどり着いた。

少女の名前は岸花雪。年齢は二十二歳。保育士の免許を持っており………なんと事件があつた○△保育園に勤めていた。

この事を知つた真戸は一つの矛盾に気づく。

報告書には『園児及び職員は全員死亡』と書かれていた。しかし、犠牲になつた職員の中に岸花雪という名前はない。

それどころか……岸花雪という名前の保育士などいないことになつていたので。

存在を消された少女『岸花雪』、彼女が事件の鍵を握っていると考えた真戸は誰にも打ち明けることなく一人で捜査を開始した。

そして今日、真戸は岸花雪と出会い、話を聞き確信する。

岸花雪、彼女が【赤鬼】であり………そして園児たちを殺したのがCGであると。

喰種である彼女の言葉を信じ、人の味方であるCCGを信用しないなど喰種捜査官として、人として失格なのだろうがそれでも真戸は彼女を信じることにした。

岸花雪の言葉には信用に値するだけの想いが伝わった。それだけで真戸には充分であった。

喰種捜査官でありながら人を守らず、逆に殺すとは……喰種よりもクズな奴等だ。

しかし、真実を知ったからといって真戸には何もできない。

園児たちを殺した罪を償わせようにも、当時の捜査官たちは全て赤鬼によって殺されているのだ。

「殺して殺されて……次に出会った時、君は赤鬼かそれとも岸花雪なのか……」

歪んでしまった歯車は元には戻らない、真戸にはわかる。

自分もそうなのだから……

真戸が夜空を見上げると、月の光が彼を優しく照らした。

☆ ☆ ☆

「店長、お疲れ様です」

「お疲れカネキくん、」

喫茶店あんでいくでの仕事を終えた僕は、この店の店長である芳村に挨拶をする。

明日から、試験勉強で忙しかったトーカちゃんが戻ってくると言うことを聞いた僕は、また怒鳴られる日々が戻ってくるのかと少しゲンナリしていつもの帰り道を歩く。

少し前から雨が降り始めていたので持ってきた傘をさしてしばらく歩いていると、前から二人の男が歩いてきた。

男たちは何やら興奮しているようで雨の音に負けない程の大きな声で話をしていた。

「凄かったよなあ」

「まさか、喰種をこの目で見れるなんて」

『喰種』その言葉に反応した僕は疑問に思う。

どうして喰種を見て無事でいられるのだろう。それにこんな時間帯に喰種を目撃するなん

て……

『またね。お兄ちゃん!』

僕は、先程まであんでいくに来ていたヒナミちゃんトリョーコさんのことを思い出す。

まさか……ね。そんなことないさ……

そして何歩か歩くと、一冊の見覚えのあるノートが落ちていることに気づいた。

そのノートを拾い上げ、名前を見てみると『ヒナミ』と書かれていた。  
「ヒナミちゃん……」

いてもたってもいられずに走り出す。

もしかしたら、ヒナミちゃんとリョーコさんが喰種捜査官に……

店長にこのことを知らせようと電話をするが繋がらない。

僕の想像通りの事が起こっているなら、ヒナミちゃんリョーコさんツ!!

喰種であるリョーコさんとヒナミちゃんが喰種捜査官に見つかればどうなるかなど  
安易に想像できた。

ヒナミちゃん達が殺されてしまう……喰種は人間よりも高い身体能力と赫子という  
殺傷能力のある特殊な器官を持っているが、リョーコさんは人を殺せる様な人じゃない  
し……ましてやヒナミちゃんはまだ子供だ。

僕が、僕が行かないとツ!!

僕は全速力で駆け出す。どこにいるのかわからない。でも、行かなくちゃ……

でも……僕が行ったところで……何ができるんだ？

そんな事を思ってしまった、立ち止まる。

こんな僕に何ができるんだろう。半端もんの僕に……



「でもッー！」

たとえ力不足でも、何もせずにはいられないんだ。  
そう思った瞬間。

「カネキさんッ」

後ろから女の子の涙声が聞こえた。振り返るとそこには、ずぶ濡れになりながら走ってきたヒナミちゃんの姿があった。

「ヒナミちゃん！ よっ良かった……」

震えるヒナミちゃんを抱きしめた僕は、ヒナミちゃんが無事だったことに安堵する。  
しかし。

「おか……お母さんが……一人……うう……ああッ」

ヒナミちゃんは泣きじやくっていた。

リョーコさん、まさか……

「行こう……」

僕は勇気を出してそう言った。

ヒナミちゃんに道案内をしてもらい、あと少しでリョーコさんと別れた場所に到着するところ、前方に人影を見つけた僕は咄嗟に隠れるように指示を出す。

シャッターが閉まった店の陰に隠れ、僕とヒナミちゃんは恐る恐る前方の様子を見

る。

「——まったく愚かだな……大人しく付いてくればこんな道の真ん中で死ぬことはなかった……せめてもの情けだ。辞世の句でも聞いてやろうか？」

「……」

そこには、白いコートを着た白髪でやせ細った男と……血だらけになったリョーコさんがいた。

白髪の男は右手に何やら得体の知れない武器を持ち、今にもリョーコさんに止めを刺そうとしていた。

「お母さッ!!」

「だッ駄目だ……ヒナミちゃんッ!!」

リョーコさんの所に行こうとするヒナミちゃんを抑えながら僕は必死に考える。

どうすればいい……どうすればリョーコさんを……どうすればッ!!?

「ヒナミ……」

リョーコさんはこちらに気づき、少しだけ目を丸くしたが………優しく微笑む。

「い……『おおっ』」

リョーコさんが何かを言おうとした瞬間。

白髪の男が右手に持っていた武器でリョーコさんの首めがけて振るう。

ダメだツ……ヒナミちゃんには見せられないツ!!

これから起こることが想像できた僕は、咄嗟にヒナミちゃんの目を塞ぐ。

ガギギギイン!!

『なツ!?!』

あと少しでリョーコさんに武器が届くというところで、白いコートを着た何者かがリョーコさんと白髪の男の間に割って入った。

武器を弾かれた白髪の男は数歩下がりがり、仲間の捜査官達が駆け寄る。

その様子を黙って見ていた白いコートの人は深々とお辞儀をした。

「こんばんは皆さん、そしてサヨウナラ」

## 何の為に、誰の為に

「真戸さんツ!! 大丈夫ですか!!」

「大丈夫だ亜門君。それより……目の前の事に集中するんだ」

亜門は上司である真戸呉夫が指をさした方向を見ながら、棍棒型のクインケ『ドウジマ』をゆつくりと構えた。

そこには、亜門達が追っていた喰種の女を庇う様に前に立った、白いコートを着た人物がいた。

フードを深く被り、俯いているせいで顔はわからない。

身長は160cm程だろうか、大きめのコートのせいで体つきがわからず、性別や年齢が判断できない。

(警告はしておくか……)

「貴様ツ! 自分が何をしたのかわかっているのか!! 喰種を庇うなど人間のするべきことじゃないツ!!すぐにそこをどいて離れる!!」

亜門はクインケを威嚇のつもりで一度振って、目の前の人物に退避するように警告した。

身長190cm程ある体格のガツチリした男が、これまた体格に見合った武器振って怒鳴る。それだけで普通の人間であれば縮こまり、素直に命令を聞くであろう……それだけ今の彼からは凄まじい覇気が出ていた。

「……はあ」

しかし、目の前の白いコートを着た人物は、命令を聞くわけでもなく。呆れた様子で肩をすくめただけであった。

「貴様ツ!!」

その様子を見た亜門は頭に血が上り、鬼の形相で白いコートの人物を睨んだ。

(出来るだけ穏便に済ませたかったのだが……)

コートを着た人物を強引に退避させようと考えた亜門に、真戸から声がかかる。

「亜門君、もう少し冷静になれ。目の前の白いコートは私のクインケを弾いたのだぞ？」

そんな事ができるのは……」

「……赫子を持つている喰種だけ、という事ですか」

「正解だ亜門君、そして……唯の喰種ではないぞ」

鱗赫のクインケ『フエグチ壺』を構え直した真戸は、チラリと後ろを見て右目を閉じて合図を出した。

その合図を見た二十区のCCG局員捜査官の草場と中島は、持っていた拳銃の照準を

白いコートの人物に向け……それぞれ二発ずつ発泡した。

銃声が響いた瞬間に、何か硬い物同士がぶつかり合う音がした。

いや、正確には発射された弾丸が、全て白いコートを着た人物が出した平らな棒状の赫子によって防がれた音だった。

「なっ!？」

その様子を見た亜門と局員捜査官の二人は驚きを隠せなかった。

白いコートを着た喰種と中島達との間は精々七m程である。

いかに人間の数倍以上の身体能力を持っている喰種といえども、この距離から撃てば確実に当たる筈であった。

しかし、目の前の喰種は一步も動かずに全ての弾丸を防いでみせた。

つまり、考えたくないことだったが、目の前の喰種はその辺にいる喰種とは桁違いの身体能力があるということだった。

「いきなり攻撃してくるなんて、酷いですね」

喰種が声を発した。

身体能力が高いという事もあり、てつきり男の喰種だと思っていたが、目の前の喰種は声質からして少女のようで、抑揚のない声でそう言った。

しかし、亜門達にとってはどうでも良い事であった。

女だろうが男だろうが、はたまた子供だろうが老人だろうが、喰種であれば殺す。そこに例外など存在しなかった。

「なるほどな、我々に殺されそうになった喰種を助けに来たということか……反吐が出る」

「……貴方達はどこまで偉い？」

「何？」

「お前達喰種捜査官は、この世に一つしかない命の価値を決めるほど偉いの？」

「ふん、喰種の分際で命の価値が、だと？ 貴様らがいるから、今もこうして誰かが悲しい思いをしている。将来を潰された人達がいる。そして……愛する者を失った人達がいる……自分の事を過剰評価する気はないが、貴様達よりマシな存在だと思っている」

「オマエたちだけだと思ふな……」

「なに？」

「お前達だけが、悲しい思いをしていると思つたら大間違いだと言つたんです」

「ふん……何を言うかとおもつ「亜門君、少し黙つていなさい」

今にも目の前の喰種に飛びかかりそうな亜門を、真戸呉夫は肩を掴んで後ろに引っ張つた。

亜門は喰種に負けず劣らない身体能力を持つているが、冷静さを欠くと行動が単調に

なってしまう。

そして、今の亜門の状態は頭に血が上り、完全に相手の実力を測り間違えている。

(さて、亜門君の今の状態では確実にやられてしまう。コレを狙ったとしたら、岸花雪

……中々に厄介な喰種だねえ)

真戸は亜門に冷静さを取り戻らせる為に後ろに下がらせ、代わりに自分が目の前の喰種と対峙する形でクインケを構える。

「真戸呉夫……」

「さて……確かに君はあの事件の被害者であろう、それは認めるし同情もする。君に殺された捜査官がいたら、今すぐにでも再教育してやりたいが、そうはいかないからねえ……」

「そう……」

「だが一つ勘違いしないで欲しい」

「？」

「喰種が人を喰う化け物である限り……人と喰種は分かり合えないッ!!」

真戸はクインケを振るいながら、そう叫んだ。

☆☆☆



「ほら、どうした？ 守っているだけでは私は倒せんぞ？」

「ツ……」

真戸呉夫、やはり一筋縄ではいかないようですね。

私は真戸呉夫のクインケを弾きながら隙を伺う。

……オカシイ。隙が見つからない。

防御ならまだしも、攻撃には必ず隙が生まれる。

それは、攻撃と攻撃の間だったり、体が疲労した時、一瞬でも攻撃以外の事を考えた時だ。

それなのに真戸呉夫の攻撃には隙が見つからない。

「ほうら!!」

「ツク」

私の右脇腹を狙った攻撃。

右の赫子で強く弾き返せば、その衝撃で体勢が崩れるはず。

「なめ……るな!!」

「おっ……」

私は赫子に力を込める意味も兼ねて声をだす。

右足を軸にして、後ろにいる笛口（だったかな？）さんを赫子で傷つけない様に、高さを調整して勢いよくその場で回転する。

そして、そのまま右から来ている骨を合わせたような鞭状のクインケに叩きつける。

「…………え？」

「ツクク、今のは中々良い手だったが、まだ甘い」

予想よりも軽い感触。

まるで、クツシヨンを叩いたかの様な柔らかい衝撃に、私は自分の赫子を見る。

そこには、私の赫子に絡みつく様に真戸呉夫のクインケがくつついていた。

「私のクインケは中々扱いづらくてね。慣れるまでに苦労したが…………慣れてしまえばいろいろ使えるんだ。例えば、衝撃を和らげる。とかね」

「くつ…………」

「そう睨むな…………赤鬼」

真戸呉夫の発言で、後ろで待機していた亜門さん達が驚愕の声を上げた。

ああ、バレていましたか。

まあ…………今更隠す必要ありませんね。

私はフードを取る。

止む気配がない雨が、私の白髪を濡らす。

「やはり、綺麗な髪色だな」

……は？

真戸呉夫がいきなりそう呟いた。

雨音のせいで、後ろに居た亜門さん達には聞こえていなかったようですが、いきなり何を言い出すのでしょうか。

わからない。

「ああ、別に深い意味はない」

「そう……」

「——だな」

え？

真戸呉夫が、何かを言った気がした。

その瞬間。右の脇腹辺りが熱くなる感覚と痛み。

見ればそこには、いつの間にか私の赫子から離れたクインケが喰いついていた。

「さて、私としてはこのまま抵抗しないでくれると嬉しいのだが？」

「っ!? ふぎ……けるな」

「ふぎけてなどいないさ、私はお前達に情けをかけてやる程には優しいのだぞ？」

「つく……偉そうに……お前たちのせいで、あの子達はッ!!」

『あの子達はッ!!……ねえ。』

ええ？

『あの事件、全ての責任を捜査官のせいにしてるけど……本当に全部捜査官が悪いのかな？』

悪い……悪いに決まっています。

『へえ……でもさ、あの時私が赫子で捜査官達を殺していれば、私の守りたかった物は失わずに済んだよね』

……。

『私が喰種だつて子供達にバレるのが怖かった。この生活を壊したくなかった。たったソレダケ……結局、自分勝手な恐怖心で子供達を救えなかった。守るべきものを守れなかった』

やめてッ！

『子供を殺したのって……ワタシだよね』

やめて……やめてやめてやめてやめてやめて。

『誰かのせいにして罪から逃げて……「貴様達よりマシな存在」全くもって亜門さんの言う通りだよ。私達がいなければあの子達は死ななかつた。あの子達の将来は失われずに済んだ』

……。

『私達は、不必要な生き物だよ』

「敵の目の前でスキを見せるとは、愚かな行為だッ!!」

「しまっ……ッ!?!」

意識が浮上する。

気が付くと、真戸呉夫のクインケが私の目の前まで迫ってきていた。

避けようにも、右脇腹の傷のせいで上手く動けない。

……赫子を展開している余裕はない。

当たれば致命傷は免れない。

これが、罰なの？

私が………私たちが存在しているから………

「見ず知らずの私の為に戦って下さり、ありがとうございます」

「えっ……？」

トンッ。

私の後ろから優しげな声が聞こえたかと思うと、不意に背中を押される感覚。

何の抵抗もなく倒れていく最中、私が目にしたのは……ニッコリと微笑んでいる笛口さんだった。

『お母さんッ』

その時、何処から少女の声が聞こえた。

震える声。悲しそうな……涙声。

そうだ。

そうだッ!!ソウダッ!!

私は何の為にここに来た。自分の存在がバレると言うリスクを冒してまでこの人を助けに来たんだ。

私は声が出した方向を横目で確認する。

そこには、電柱の影から涙を流しながらこちらを……いえ、笛口さんを見ている少女がいた。

そう、私はあの子が泣いているのを発見して、ここまで来たんじゃないか。

助ける。

助けるんだ……助ける。助ける。助ける。たすける。タスケルンダ。

『りょう!! どうして、どうしてなののおお』

『あかね……嘘よ。嘘』

アノ時のコウケイだ。

イヤダ。

モウ、アンナカナシイ……ミタクナイ。

☆☆☆

赤鬼の隙を付いた真戸呉夫の一撃は、赤鬼を庇った笛口に確実に届くはずだった。しかし。

笛口の首元に届く瞬間、真戸に向かって何かが迫って来ていた。

瞬時にクインケを戻しながら後ろに下がる。

その瞬間に真戸がいた場所が、大きく抉れる。

「ほう……」

真戸は自分の見たものが信じられず、動きを止める。

しかし、すぐに気持ちを落ち着かせて冷静にソレを分析する。

「なる程、赤鬼……とはよく言ったものだ」

「アハッ!!」

真戸の目の前には、赤鬼がいた。

だが、先程の姿と変化している。

紅の光沢のある滑らかな赫子で鼻から下を覆い、仮面で隠れていた紅の瞳が顕になる。

白いコートを着てはいるが、袖から見える手は、籠手の様な紅い赫子で覆われていた。

そして、何より一番変化しているのは、彼女の赫子であった。

腰の辺りから左右に五本ずつ——計十本出た赫子。





## また会う日まで

「私を捕まえるう〜?」

「そうだと、君は喰種で私は喰種捜査官だ。捕まえるか殺す意外選択肢は無いだろう?」

赤鬼の雰囲気が変わってから雨がより一層強くなったが、赤鬼と真戸の会話ははつきりと聞こえる。

亜門は、自分の上司である真戸の様子を見ながら、何時でも撤退出来る様に後ろにいる局員捜査官の二人に静かに声をかけた。

「中島さん、真戸さんが一歩でも後ろに下がったら逃げて下さい」  
「わかりました。しかし……」

中島はそこまで言う口を閉ざす。

亜門は、中島が言いたいことがわかった。

(きつと、ヤツを前にして、逃げられるのか? と言いたいのだろうか)  
わかっているのだ。

今の自分たちが、どんなに危険な状態に陥っているのか。

## SSレート『赤鬼』

○△保育園襲撃事件をきっかけに、その存在が明らかになった喰種。

あの事件の後から、捜査官殺しを行うようになったヤツを捜査するということで、久土正人准特等捜査官と相棒である広野一等捜査官が担当だった筈だ。

定期的に送られてくる赤鬼の資料に、亜門は驚きを隠せなかったことを覚えている。

まず、赤鬼に狙われた捜査官の殆どが死んでいることに。

普通の喰種ではありえない身体能力、反射神経を持つていることに。

殺傷能力が高く、甲赫でありながら——甲赫が最も苦手とする形質変化をする赫子に。

そして……赤鬼が赫者であることに。

『赫者』、同種喰いをする喰種に希に見られる変化で、赫者になった喰種は、赫子を身に纏う様に展開すると亜門が読んだ資料に書いてあった。

(幾ら真戸さんでも、一人で赫者を相手にするのは無理だ。)

撤退の合図が出たら、体力、肉体の強度で勝っている自分が殿を引き受けようと決意する亜門は、クインケを持つ手に力を入れて赤鬼と相対する真戸の動向を見守った。

(さて……困ったものだ。撤退したいのだが、隙が全く見つからんな)

心の中で深い溜息を付いた真戸は、この場から撤退する為に数ある選択肢の中から最も良いものを選ぶ。

「さて赤鬼、だいたい雨が強くなってきたな」

「ソウダねえ、こレじゃあ外で鬼ごっこデキナイねえええ」

それが会話だ。

見たところ、こちらが動かない限りは赤鬼も動く気配はない。

こちらが話せば赤鬼も何か返してくるので、その隙を狙って逃げるとというのが真戸の作戦だった。

（赫者には驚かされたが、口調や性格が変わっている。原因は不明だが思考能力が低下していると見て良いだろう）

ならばこうして会話をしてれば、必ず隙が出来るかと判断した真戸は、赤鬼を刺激しない様に自然体で話せる様、ほんの少しだけ身体の力を抜く。

しかし。

「んー……そろそろカウントが終わるけど、逃げなくていいの？」

「っ!! 今すぐ撤退だっ!!」

「何を？」と問いかけようとした真戸はあることに気がつき、亜門たちに撤退の合図をだす。

亜門は「殿は自分がやります」と言ったが、そんなことをしている場合ではない。

「亜門君、殿など無意味だ！ とにかく走れ!!」

真戸は、自分の考えが間違っていたことに後悔する。

一秒でもこの場所に留まっていたてはいけなかった。

赤鬼が「鬼ごっこ」と言った瞬間に逃げなければいけなかったのだ。

「3……2……1……ゼロ♪ じゃあ、追いかけるね!」

数メートル走った所で、真戸たちの後ろから声が聞こえた。

「亜門君！ 彼等を逃がす。手伝ってくれ」

「はいッ!!」

確実に追いつかれると察した真戸は、局員捜査官である草場と中島を逃すために亜門と共に赤鬼と対峙する。

ほんの少しでも時間を稼げれば、局員捜査官の二人が赤鬼の情報を持ち帰ってくれると信じて。

「あれれえ？ 逃げないの？ 鬼ごっこだよ？ ルール知らないの？」

「知っているとも。別に逃げるだけが鬼ごっこじゃないだろう？」

「あー!! 確かにそうだね!!」

「アハハッ、そういえばリョウ君も囷になるために私に向かってきたっけ」と言いながら

ゆつくりと近づいてくる赤鬼。

両側から出た赫子が、片方は亜門を、もう片方は真戸へと伸びてくる。

「……今の君が本当の君なのかい？」

真戸が問いかけると、あと少しで真戸と亜門に赫子が届くという所で止まる。

「……どつちだと思おう？」

「ッ!？」

赤鬼の口調は、赫者になる前の抑揚のないものに変わっていた。

真戸はわからなくなる。

先程までの明るく、感情の籠った声は赫者になった影響だと思っていたが、今の声は抑揚のない声。

どちらの彼女が本物で、どちらが偽りだ？

「(っ)遊び……知ってる？」

「(っ)遊びだと……まさかッ！」

赤鬼の言葉に、真戸は一番考えたくなかったことが真実である事に気付かされる。

呆然と立ち尽くす真戸と、その様子を見てケタケタと笑っている赤鬼。

状況がいまいちわからない亜門は、真戸に問いかける。

「真戸さん、先程から何を話し……」

「亜門君ッ!! 私の間違っていたッ!! 喰種にほんの少しでも同情した私が馬鹿だった。コイツはッ、この屑はッ!! 紛れもない化物だッ!!」

鬼の形相。

亜門でも今まで見たことのない程の憤怒の表情で、真戸は叫ぶ。

「クスクス……貴方の様に素敵な表情をするから……ごっこ遊びつてやめられないの」  
「貴様ッ!」

「でも、真戸さんの考えは一つ間違ってる。あの時の事件、お前たちが無謀な強行作戦に出たのは確かです……」

「なに? それな「でもね!! 子供達を殺したのはワタシ」

真戸の言葉を遮った赤鬼の言葉に、真戸と亜門は強い殺意が沸く。

「ごっこ遊び……そう、確かに私は保育士ごっこをしていた。でもね、私は本当に人間の子供がダイスキなの。太陽の様に明るく、温かい笑顔がスキ。希望に満ち溢れた顔がスキ。何でも信じちゃう純粹なところがスキ。言いだしたらキリがないくらい人間の子供のありとあらゆる所がスキ……でもね、だったら私達はどうなの? 生まれてきた瞬間から世界に不必要とされて、子供の頃から一人で生活して、両親も友達も頼れる人もいなくて、毎日命を狙われて、絶望を味わって!! 未来に何の希望もなくてさッ!!」

ゾワリと真戸と亜門の背筋を這う悪寒。

赤鬼から伝わってくる殺意、憤怒、憎悪………悲しみ。

「だから私が殺してあげたの!! 痛みや悲しみ………絶望に歪むあの子達の顔が見たくなかったからさア!! 人間の子供のくせに絶望なんて似合わないでしょお!!」

「クズが……」

真戸はそう言つてクインケを構え、亜門もそれに続く。

彼等に撤退の二文字はない。

勝てる見込みはない、だが、コイツを一秒でも早く殺さなければいけないと思つての行動だった。

赤鬼と彼等の戦いが始まろうとした直後——銃声が響いた。

☆ ☆ ☆

「店长、お疲れ様でしたあ!」

「お疲れ様大橋ちゃん、また明日もお願いね」

「はい! 明日も頑張ります」



ビッグガールでのバイトを終えた私は店長に挨拶すると、仕事着から私服に着替えて外に出る。

夕方頃から降り始めた雨は、夜になっても止む気配はなく、むしろ強くなっている様子だ。

家から持ってきた水玉模様の折りたたみ傘を広げた私は、少しでも濡れないように足早にいつもの道を歩く。

そういえば、今日のシフトに雪ちゃんも入ってたけどいなかったなあ……どうしたんだろ。

私は、店長がスカウトしてきた子の事を思い出す。

とても可愛くて、綺麗な白髪が特徴的な女の子、岸花雪。

無口で無表情で目が怖い子だけど、話せば返してくれるし、メールアドレスも交換した私の友達……になりたいな。

『わからない』

私は、この前雪ちゃんが言った言葉を思い出す。

何時も無表情でいる雪ちゃんがどうしても気になって質問した答えが、『わからない』だった。

あの時の雪ちゃんの顔は、本人は気づいていない様子だったけどとても悲しそうだった。

た。

だから私は、お節介かもしれないけど、雪ちゃんの為になにかしてあげたいと思った。「でもどうすればいいんだろうなあ……」

さっぱり見当がつかない。

だからまずは、友達になるって事を目標にしてるけど……難航してます。

だって「友達になろう！」って言ったら「……私はもう友達だと思つてたのに」って言われたらどうしよう！ とか「友達……いらない」なんて言われたらどうしようって思っちゃつて中々声をかけれない。

ええい！ 何をうじうじしているんだ私!! 友達作りも恋と同じ、当たつて砕けるの精神で頑張ろう！

「よし、頑張るぞー！」と声を上げていた私に、「あの……」と、後ろから声をかける人がいた。

突然声をかけられてビックリしたこと、今の独り言が聞かれていたことに恥ずかしく思いながらも振り返ると、そこには一人の女の子が傘も差さずに立っていた。

雨に濡れているせいか、薄桃色のポプパーマの毛先に元気がない。

「大丈夫ですか?」

「……大橋さん」

聞いたことのある声。

私は俯いている女の子の顔を恐る恐る見る。

「え……雪……ちゃん？」

いつも見ていた、とても可愛らしい顔立ち。

私の目の前にいる子は、岸花雪だった。

「その髪型どうしたの？ 髪色もツ……傘差さないと風邪引いちやうよ!!」

私は急いで雪ちゃんに自分の折りたたみ傘を渡そうとするが、手で止められた。

どうして？ と言おうと雪ちゃんを見ると、とても優しい笑みを浮かべていた。

「ありがとう大橋さん」

何に對してのありがとうなの？ と言いたかった。けど、言えなかった。

私の横を通り過ぎた雪ちゃんが、消えるような声で……

「岸花雪は、もういない」

そう言った。

## 第二章

## プロローグ

ワタシには自慢の姉がいた。

綺麗で優しくて何時も笑顔だった姉は、ワタシにとってこの糞みたいな世界で生きる為の唯一の光だった。

だけど、姉は違った。

姉は……子供たちの未来こそがこの世界の……ワタシたちの光だと考えていた。

子供たちが笑顔で暮らせる世の中にしたいと姉は何時も言っていた。

ワタシたちの様な化物がいる限り、そんな事は不可能だとワタシはその度に言ったが、姉は自分の考えを変えることはせず、ワタシの反対も振り切って保育園に勤めるようになった。

「色々大変だけど、子供の笑顔が見れるだけで幸せっ!!」

（そう……良かったね）

「もおー！ 何で何時もそんな冷めてんのよ！」

（何時もその話だから）

姉が子供達の為に頑張っているのは知っている。

姉の事が心配で、ワタシは近くで様子を見ているから……。

姉が幸せなら、ワタシはそれで良かった。

姉の為なら、ワタシは消えてもいいと思ったのに……あの事件が起きた。

捜査官に追われていた喰種の親子が、姉の勤めている保育園に逃げてきたのだ。

ワタシは、成り行きを黙って見ていた。

喰種の親子を助けようとする人間の子供たちや先生、痺れを切らした捜査官による強

行突破。

飛び交う怒声に、子供たちの泣き声。

飛び散る肉片に、増幅する憎悪……哀しみ。

何時の間にか、ワタシは朱色に染まった部屋に一人立っていた。

それから、姉はワタシの前から消えてしまった。

ワタシは姉を必死に探したが、どこにも姉は存在しない。

(どうして……どうして見つからないの……ユキお姉ちゃん)

ワタシは姉を探すのを諦めた。

諦めた代わりに、自分が姉になろうと決めた。

何時だったか……姉と遊んだごっこ遊びと同じように、その役になりきるんだ。

髪を白髪にして、綺麗な顔にして、子供に優しい姉になろうと頑張った。でも駄目だった。

結局ワタシはワタシだ。外見をどんなに変えても、姉にはなれない。人と付き合つたことがないワタシは上手く笑えない。会話もできない——そもそも、ヒトが嫌いだ。

特に子供は苦手……喜怒哀楽が激しすぎてついていけない。

こんなのが未来の光だなんて——ワタシは認めない。

ヒトは愚かで、貪欲で、醜い生き物だ。同じ種同士で貶し、傷つけ、殺し合う。

それは喰種にも言える。ヒトの血肉でしか生きることができず。同じ種同士で傷つけ、殺し合う。

もう、ワタシには何が正しいのかもわからない。

お姉ちゃんがいれば。お姉ちゃんがいれば。お姉ちゃんがいれば。

ワタシには何もいらない。

お姉ちゃんがいらないこんな世の中は——。